

田井座遺跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財
包蔵地緊急発掘調査報告書

1992. 3

長野県飯田市教育委員会

田井座遺跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財
包蔵地緊急発掘調査報告書

1992. 3

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市鼎地区は天竜川支流の飯田松川右岸に位置し、飯田市街地に隣接する住宅地域として開発の進行が著しい地区です。地区内において先人達がとどめた足跡は縄文時代草創期以来各所に刻まれており、縄文時代中期以降大規模な集落が多数営まれています。また、中世以降は松尾城に拠った小笠原氏の勢力伸長の基盤となる等、重要な役割を果たした地域のひとつといえます。

一方、近年飯田市街地における開発は飽和状態に達しており、周辺地区的道路環境の整備が進みつつある状況と相まって、市街地周辺へ企業や住宅が拡散しつつあります。この鼎地区においても、飯田バイパスの一部と市道運動公園通りが開通して以来、沿線への店舗・事業所等の進出が相次いでおり、この度の開発もこうした傾向の一環にあります。飯伊地方の経済活動の振興を考えますとこうした開発も是認すべきといえ、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることも次善の策ではありますがやむを得ないものといえます。調査の結果は本報告のとおりであり、これまで周辺で積み重ねられてきた調査成果にさらに重要な知見を加えたわけであります。すなわち、地域の歴史解明が進むとともに、ひいては古代日本史の復元の一助となるものと確信いたします。

最後になりましたが、文化財保護の本旨に厚いご理解を賜ったサンプラザー株式会社ならびに地元の皆様、現地作業・整理作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を申し述べる次第であります。

平成4年3月

飯田市教育委員会
教育長 小林 恒之助

例　　言

- 1 本書はサンプラザー株式会社の店舗建設に伴う飯田市鼎一色139番地1ほかの埋蔵文化財包蔵地井座遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は開発主体者であるサンプラザー株式会社の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
- 3 調査は、平成2年1月30日～2月3日に試掘調査を実施し、本調査を4月3日～4月20日に実行なった。統いて平成3年度中に整理作業及び報告書作成作業を行なった。
- 4 今次調査地点は一般国道153号飯田バイパス路線および市道運動公園通り路線内の調査地点と近接しており、連続する遺構番号を付した。
- 5 発掘調査および整理作業においては一貫して遺跡略号TIZに地番の139-1を付して使用した。
- 6 本報告書の記載については、記載順は住居址を優先した。遺溝図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
- 7 本書は、馬場保之が執筆し、本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行なった。
- 8 本書に掲載された図面類の整理は馬場が、遺物実測は濱谷恵美子・馬場が、写真撮影は馬場があたった。なお同作業実施にあたり佐々木嘉和・佐合英治・吉川豊が補佐した。
- 9 本書の編集は馬場が行ない、小林が総括した。
- 10 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
- 11 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で示した。
- 12 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序

例言

I 経過

1 調査に至るまでの経過	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	1

II 遺跡の環境

1 自然環境	3
2 歴史環境	5

III 調査結果

1 遺構と遺物	8
(1) 壕穴住居址	8
1) 弥生時代後期	8
① 32号住居址 ② 34号住居址	
2) 中世	10
① 35号住居址	
3) 不明	11
① 33号住居址 ② 36号住居址	
(2) 土坑	12
① 土坑14 ② 土坑15 ③ 土坑16 ④ 土坑17 ⑤ 土坑18	
⑥ 土坑19 ⑦ 土坑20 ⑧ 土坑21 ⑨ 土坑22 ⑩ 土坑24	
⑪ 土坑26 ⑫ 土坑27 ⑬ 土坑28 ⑭ 土坑29 ⑮ 土坑30	
⑯ 土坑31 ⑰ 土坑32 ⑱ 土坑33 ⑲ 土坑34 ⑳ 土坑35	
㉑ 土坑36 ㉒ 土坑37 ㉓ 土坑38 ㉔ 土坑39 ㉕ 土坑40	
㉖ 土坑41 ㉗ 土坑42 ㉘ 土坑43 ㉙ 土坑44 ㉚ 土坑45	
㉛ 土坑46 ㉜ 土坑47 ㉝ 土坑48 ㉞ 土坑49 ㉟ 土坑50	
㉛ 土坑51 ㉜ 土坑52 ㉝ 土坑53 ㉞ 土坑54 ㉟ 土坑55	
㉛ 土坑56 ㉜ 土坑57 ㉝ 土坑58 ㉞ 土坑59	
(3) 壕穴	25
① 壕穴3 ② 壕穴4 ③ 壕穴5 ④ 壕穴6 ⑤ 壕穴7	

⑥ 壺穴 8	⑦ 壺穴 9			
(4) 方形周溝墓		28		
① 方形周溝墓 9	② 方形周溝墓 10			
(5) 溝址		31		
① 溝址 27	② 溝址 28	③ 溝址 29	④ 溝址 30	⑤ 溝址 31
⑥ 溝址 32	⑦ 溝址 33	⑧ 溝址 34	⑨ 溝址 35	⑩ 溝址 36
⑪ 溝址 37				
(6) 溝状址		36		
① 溝状址 1	② 溝状址 2	③ 溝状址 3		
(7) 集石		37		
① 集石 1				
(8) その他		38		
① 柱穴				
② 造構外出土遺物				
IVまとめ		45		

挿図目次

挿図 1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	4
挿図 2 調査位置および周辺地図	6
挿図 3 32号住居址	8
挿図 4 34号住居址	9
挿図 5 35号住居址	10
挿図 6 33号住居址	11
挿図 7 36号住居址	12
挿図 8 土坑14~21・24~26~30・35	13
挿図 9 Aトレンチ	16
挿図10 土坑34~34・36~49	18
挿図11 土坑50~57	22
挿図12 Bトレンチ	24
挿図13 壺穴 3~9	26
挿図14 方形周溝墓 9・10	29
挿図15 溝址28・33・34	30
挿図16 溝址29~32	33・34

挿図17	溝状址 1～3	36
挿図18	周辺柱穴平面図 (1)	39
挿図19	周辺柱穴平面図 (2)	40
挿図20	周辺柱穴平面図 (3)	41
挿図21	周辺柱穴平面図 (4)	42
挿図22	周辺柱穴平面図 (5)	43
挿図23	周辺柱穴平面図 (6)	44

付図目次

付図 1 田井座遺跡遺構全体図

図版目次

- 第1図 32・34号住居址出土遺物
- 第2図 34・33・36号住居址、竪穴8、方形周溝墓9・10出土遺物
- 第3図 溝址28～31、遺構外出土遺物
- 第4図 遺構外出土遺物
- 第5図 遺構外出土土器
- 第6図 金属製品

写真図版目次

- 図版 1 遺構分布状況
- 図版 2 32号住居址・炉・遺物出土状態
- 図版 3 34号住居址・土坑19、竪穴3
- 図版 4 竪穴7・9、方形周溝墓9
- 図版 5 方形周溝墓10、溝址28～30
- 図版 6 溝址31・32、溝状址1・2
- 図版 7 集石1、Bトレンチ
- 図版 8 柱穴群
- 図版 9 32・34号住居址
- 図版10 36号住居址、方形周溝墓9・10、溝址28・30、遺構外出土遺物
- 図版11 遺構外出土遺物

図版12 造構外出土遺物、土坑19

図版13 試掘調査風景、発掘作業風景

Ⅰ 経過

1. 調査に至るまでの経過

昭和63年12月20日付で飯田市八幡町2152番地3 サンプラザー株式会社代表取締役小笠原東一より、飯田市鼎一色地籍での店舗建設について、埋蔵文化財発掘調査に関する協議依頼書が提出された。当該地は埋蔵文化財包蔵地田井座遺跡の一画に位置し、一般国道153号飯田バイパスおよび市道運動公園通り建設に先立つ発掘調査で、縄文時代から中世にかけての重要遺構が多数検出された地点に隣接する。そこで、協議依頼書に基づいて平成元年1月13日長野県教育委員会文化課担当職員を交え現地協議を実施した結果、保護措置を講ずる必要があるとの県教委の回答がなされた（63教文第171号）。その後、平成2年1月になり、諸般の状況の中で建設計画が具体的化したのを受けて、平成2年1月30日試掘調査に着手した。重機により表土除去を行ない、建物全体と駐車場2箇所（A・Bトレンチ）について遺構分布状態を確認した。全面にわたり、弥生時代後期から中・近世にかけての竪穴住居址等諸遺構が分布しており、本調査の実施が必要であると判断された。

2. 調査の経過

関係者による諸協議を受け、平成2年4月3日委託者サンプラザー株式会社代表取締役小笠原東一と受者飯田市長田中秀典との間で発掘調査に関する委託契約を締結し、これに基づいて同日発掘調査に着手した。人力による遺構検出作業の後、個々の遺構について掘り下げ精査を行なった。そして写真撮影・測量調査ならびに住居址炉址の断ち割り調査を実施し、4月20日現地作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗・注記・接合・復元等整理作業および報告書作成を平成3年度にかけて行なった。

3. 調査組織

1) 調査団

調査担当者	小林 正春	馬場 保之			
調査員	佐々木嘉和	佐合 英治	吉川 豊	滝谷恵美子	
現場作業員	木下 当一	坂下やすみ	木下 傳	高木 義治	高橋収二郎
	福沢トシ子	藤本 幸吉	細田 七郎	正木実重子	松下 直市
	松下 真幸	松島 卓夫	森 章	矢澤 博志	吉川甲二郎
	吉川 正実				

整理作業員	池田 幸子	伊原 恵子	大藏 祥子	金井 照子	金子 裕子
	唐沢古千代	唐沢さかえ	川上みはる	木下 早苗	木下 玲子
	柳原 勝子	小池千津子	小平不二子	小林 千枝	斎藤 徳子
	佐々木真奈美	渋谷千恵子	田中 恵子	筒井千恵子	丹羽 由美
	萩原 弘枝	林 勢紀子	原沢あゆみ	橋本 宣子	平栗 陽子
	福沢 育子	福沢 幸子	牧内喜久子	牧内とし子	牧内 八代
	松本 恵子	三浦 厚子	南井 規子	宮内真理子	森 信子
	森藤美知子	吉川 悅子	吉川紀美子	吉沢まつ美	若林志満子

2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村 隆彦	(社会教育課長、平成2年度)
安野 節	(社会教育課長、平成3年度)
中井 洋一	(〃 文化係長)
小林 正春	(〃 文化係)
吉川 益	(〃 〃)
馬場 保之	(〃 〃)
篠田 恵	(〃 〃)
瀧谷恵美子	(〃 〃 、平成3年度)

II 遺跡の環境

1. 自然環境

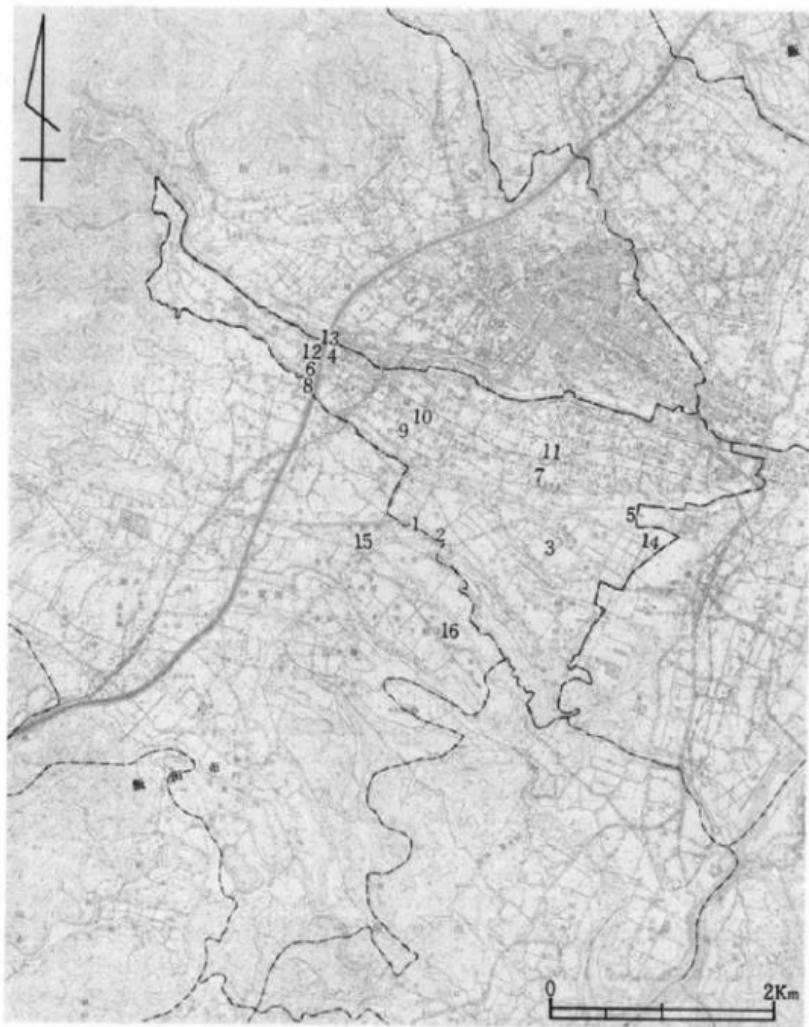
鼎地区は昭和59年12月の飯田市との合併により行政区画上、飯田市鼎となった。合併前の下伊那郡陽町は周囲を飯田市に囲まれた下伊那郡の飛び地であった。鼎地区は飯田市街地の南西側を流れる飯田松川の対岸に位置し、飯田松川に沿った細長い地区である。西側は伊賀良地区に接し、南東側は松尾地区と下伊那郡上郷町に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。鼎地区的場合、微地形の変化はあるものの、飯田松川に平行する段丘地形上に立地し、基本的には3つの段丘面より構成される。上位の段丘では標高500m前後に笠松山系から発達した扇状地形の末端(扇端)があり、これより以西は伊賀良地区、以東が鼎地区となっている。

田井座遺跡が位置している一色地籍は、鼎地区的最上位段丘上にあり、伊賀良北方地籍と接している。中央アルプスの笠松山麓から発達した扇状地が終息し段丘面に移行する付近で、天竜川の小支流毛賀沢川による浸蝕谷が始まり、飯田松川に面した段丘崖との間に舌状台地が形成される。この舌状台地基部付近が一色地籍で、その東方は名古熊地籍となる。標高500m前後で形成され始めた舌状台地の幅は約300mである。台地の中央部付近は東西方向にやや低く凹み、湿地帯を成している。両側の段丘崖に近い部分約100mずつが乾燥した台地で、中央の約100mが湿地である。台地上は全面に強い粘質のローム層が分布しており、自然の風水害に対しては安定した地形条件下にあるといえる。

田井座遺跡はこの一色地籍の西隅に位置し、北西側は山麓から続く大扇状地の続きであり、伊賀良西の原地籍に接する。南西側は毛賀沢川に面する台地端から中央湿地までの間がやや小高い台地で、中央から北東と南西に緩やかに傾斜している。南西向きの緩斜面は水田の造成により削平埋め立てがあり、一部ローム面まで削平が及んでいた。北東側の緩斜面はおおむね果樹園で、深耕はあるものの削平ではなく、地表から50~100cmでローム面に達する。検出調査した遺構はローム面に掘り込まれている。

以上のように、田井座遺跡は台地端に位置し、乾燥した場所であるとともに、すぐ近くに湿地があり、生活・生産を営むのに適した場所といえる。



- | | | |
|------------|-----------|------------|
| 1. 田井座遺跡 | 2. 一色遺跡 | 3. 名古熊下遺跡 |
| 4. 天伯B遺跡 | 5. 鎌小塙遺跡 | 6. 天伯A遺跡 |
| 7. 柳添遺跡 | 8. 山岸遺跡 | 9. 日向田遺跡 |
| 10. 六反畠遺跡 | 11. 黒河内遺跡 | 12. 天伯1号古墳 |
| 13. 天伯2号古墳 | 14. 物見塙古墳 | 15. 殿原遺跡 |
| 16. 下の原遺跡 | | |

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

2. 歴史環境

鼎地区における埋蔵文化財包蔵地は松川氾濫源および段丘崖部を除くほぼ全域に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、代田・山岸・天伯A・天伯B・猿小場・矢高原・八幡原・黒河内・田井座・一色・名古熊・六反畑・日向田・柳添の各遺跡がある。

こうした文化財に表われた先人達の活動の証左は旧石器時代までさかのぼる。断片的な資料ではあるが、天伯B・猿小場遺跡からはナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると、地区内全域に遺跡の存在することが確認されている。しかし、その内容はそれぞれの時期によって異なっている。早期・前期の遺跡・遺物の分布は複数の遺跡で認められるが、集落址の調査例は田井座遺跡に限られ、定着・安定した遺跡の姿を捉えることができるようになるのは、統く中期になってからである。地区内全域の中位・高位段丘上の各所に相当規模の集落が分布しており、これまでに天伯A・柳添遺跡等が調査されている。後期・晩期になると遺跡数・規模とも減じ、猿小場・山岸・六反畑遺跡が調査されているにすぎず、具体的な状況は不明である。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。該期の集落展開としては、中・低位段丘の湧水線および各段丘面中央に発達する湿地帯を利用した水田經營と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。後期前半では猿小場・山岸遺跡で住居址が調査されている。後期後半になると、調査面積の大小、遺跡範囲内での調査区の位置など問題はあるものの、調査区内に住居址が密集する大規模な集落址と、住居址が散在する集落址という大きく2つの類型がみられる。前者は低位段丘面の山岸遺跡に代表され、後者は高位段丘面から扇状地上に多く、猿小場・田井座遺跡があげられる。それは前述の基盤となる生業形態の相違と関わるものと考えられる。

古墳時代の様相は、前期にあたる状況がほとんど不明であり、わずかに、山岸遺跡にその一端をうかがえる程度であるが、後期になると、調査事例が増加する。この時期の大規模な集落址としては、低位段丘面上の山岸・天伯B・六反畑・黒河内遺跡がある。またこの時代の集落址以外の特徴的なものとして古墳がある。鼎地区には現在消滅したものを含め14基の古墳が知られている。詳しく調査された古墳は後期の天伯1号・2号古墳があり、最近調査されたものに現在整理作業中の物見塚古墳がある。

奈良時代の鼎地区的状況は不明であるが、古墳時代後期を含め奈良・平安時代以降、隣接する松尾・伊賀良地区において、東山道の経路および「育良駅」の所在地、莊園を構成する村落の起源等に関連するとと思われる箇所があり、当地区においてもそれらとの関連を考える必要がある。

平安時代の集落址は地区内全域に分布し、猿小場遺跡では9世紀後半を中心に25軒と多くの住居址が検出されている。しかし、一般的には遺跡単位では住居址は少なく、むしろ散在する分布状態をみせている。日向田遺跡では平安時代後期の住居址から墨書き土器が出土しており、前述の



挿図2 調査位置および周辺地図

伊賀良地区等との関連が暗示される。なお平安時代の住居址が検出された遺跡の多くからは、中世の住居址も検出されている。猿小場遺跡では16軒の住居址が調査されている。

以上、鼎地区の遺跡を中心に各時代を概観した。こうした脈絡の中で、今次発掘調査の成果がどのように位置づけられるかは本書の内容により明らかにされるといえる。

III 調査結果

1. 造構と造物

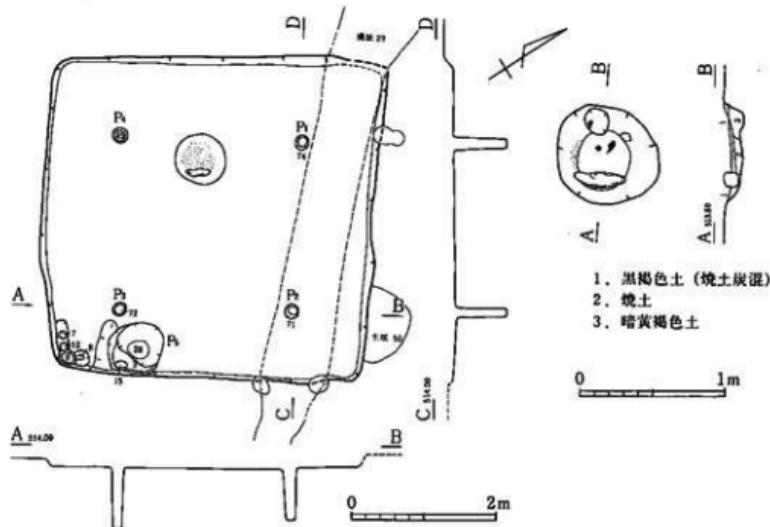
(1) 壺穴住居址

1) 弥生時代後期

①32号住居址(図版3、第1図1~8)

調査区東側で検出した。溝址29に切られ、土坑50と重複する。

4.5×4.3mの不整方形を呈する壺穴住居址で、北隅壁の一部は溝址29に壊され遺存していない。北東辺の長さが長いためプランは歪む。主軸方向はN54.3°Wを示す。埋土は漆黒土の一層である。床面は掘削底面であるローム層によるものであり、非常に硬く締まった面がほぼ全面にわたって検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は6~18cmを測る。主柱穴は4本確認され、径約20cmの円形を呈し、深さはP4を除き71~74cmと揃う。P3南東の南東壁南隅寄りに掘り込まれたP5は不整方形を呈し、周囲にわずかに高い土手状縁部が検出された。形態から入り口施設と考えられる。南隅には幅20cm程の落ち込みがあるが、柱穴が連続する部分と考えられる。



図版3 32号住居址

P1とP4の中間やや中央寄りには炉址が設けられており、中央側に炉縁石が据えられる。焼土が厚く発達しており、埋設土器を持たない地床炉である。

北西壁際ほぼ中央で高环が出土し、またP1北西でわずかに朱が検出された。

溝址29との新旧関係は溝址29底部が本址床面上位で確認されたことによる。

出土遺物は弥生土器壺・甕・高环、有肩属形状石器等であり、出土量は僅少である。

壺は振幅の小さな波状文や横描羽状条線文が施文されるものと、やや振幅の大きい横描波状文+斜走短線が施文されるものがある。内面の調整には刷毛目調整がみられ、また炭化物が付着するものがある。高环は环部外面に稜をもち、口縁部が外反する。内面から外面後まで横位ヘラミガキ、稜以下は縱位ヘラミガキが施される。内面に炭化物が少量付着し、内外黒褐色を呈する。

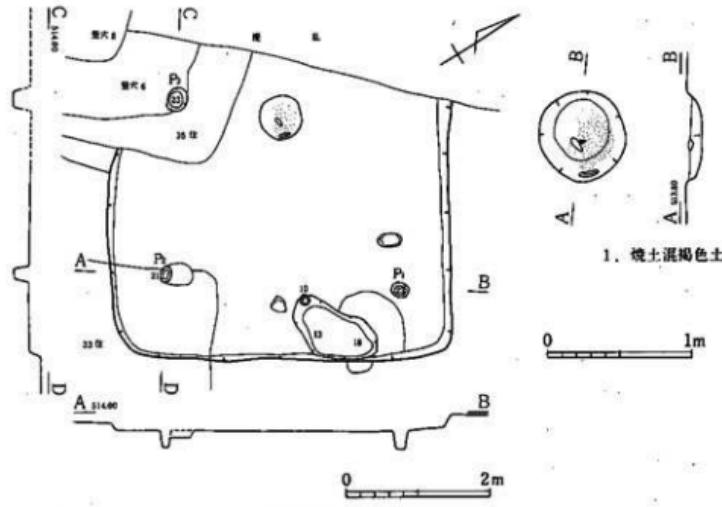
有肩属形状石器は基部両側に細かい剥離が施され、やや基部が長い。硬砂岩製である。ロー状光沢は観察されない。

他に他時代の混入遺物として縄文時代中期後半の土器片、古墳時代の土師器壺が出土した。

出土遺物・重複関係等から弥生時代後期の堅穴住居址と考えられる。

②34号住居址（挿図4、第1図9～第2図1）

調査区西側に検出された。33・35号住居址、堅穴6に切られる。また、本址の北西側1/4程度は、近年まで使用されていた水路による擾乱のため壊されていた。



挿図4 34号住居址

南西・北東方向で4.7mを測る方形の堅穴住居址である。主軸方向はN58.2°Wを示す。埋土は上層が黒色土・下層が褐色土で、レンズ状の堆積を示す。床面はやや軟弱である。壁高は10~17cmを測り、やや急な立ち上がりを示す。主柱穴はP1~P3の3本が検出され、穴の底部レベルはほぼ揃う。しかし、平面形・規模はばらばらで、おそらくP2のような長椭円形を呈するものと思われる。南東壁際東寄りに不整形なP5が掘り込まれる。北東縁に土手状の高まりがあり、入り口施設と考えられる。

北西壁寄りほぼ中央に炉址が確認された。やや焼土が厚く認められ、地床炉である。炉址の北側から高環が出土した。上部に33号住居址貼り床が確認された。

出土遺物は弥生土器壺・甕・高环・鉢、砥石等があり、出土量は僅少である。

甕は振幅の大きい櫛描波状文に斜走短線が組み合うもの、櫛描波状文施文で口縁端面に沈線が施されるもの等ある。また外面の調整には刷毛目後ミガキが施されるものがある。高环脚部は透かしが3孔あり、内面上部に紋り痕が残る。鉢は外外面に顯著に輪積み痕を残し、底部は分厚い。砥石製で、握置型である。

他に混入遺物として繩文土器深鉢片が出土した。

出土遺物・重複關係等から弥生時代後期に比定される。

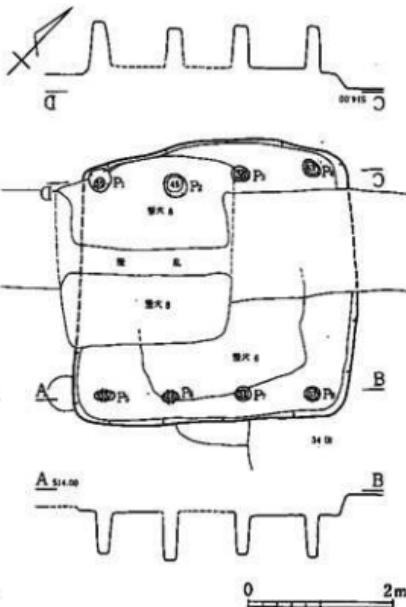
2) 中世

①35号住居址(挿図5)

調査区西側で検出された。堅穴6・

8に切られる。中央やや北西寄りを近年まで使用されていな水路により壊される。

3.8×3.8の方形を呈する堅穴住居址で、南西・北東方向はN45.4°Eを示す。埋土は黄土混褐色土の一層である。壁高は8~29cmを測り、やや急な立ち上がりを示す。床面は硬く締まっている。主柱穴はP1~P8の8本が確認され、南東壁・北西壁際に等間隔に4本ずつ並ぶ。平面形や大きさにはばらつきがみられ、円形を呈するもの、長椭円形を呈するもの等あり、大きさは20~35cmを測る。柱穴の深さもややば



挿図5 35号住居址

らつき、45~66cmで55cm程度のものが多い。出土遺物は陶器碗1片のみである。

本址は構造的に特異であり、主柱穴の配列に特色がある。主柱穴の配列から考えられる上部構造は切妻形の建物であり、該期の住居の形態を知る上で貴重である。

出土遺物・重複関係等から中世の住居址と考えられる。

3) 不明

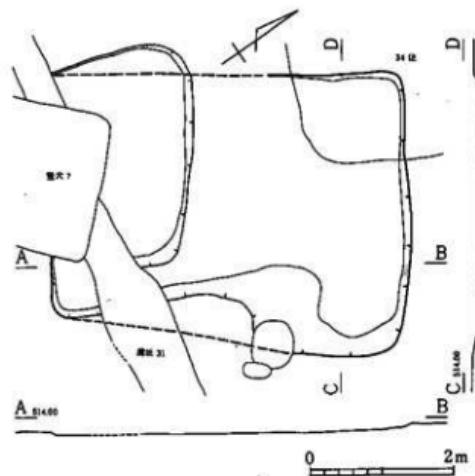
①33号住居址（挿図6、第2図2・3）

調査区西側に検出された。34号住居址を切り、竪穴6・溝址31に切られる。

掘り込みが浅く上部は表土除去に際し削平したため、不整形を呈するが中央部分で硬い床面を検出したため、竪穴住居址と判断した。埋土黄土混黑色土である。規模3.8×4.9mを測り、南東壁の方向はN54.8°Wを示す。壁高は1~8cmを測るが、壁の立ち上がりの状態は上部削平のため不明である。床面は中央部で硬く締まるほか、34号住居址上部に貼り床が検出された。南東壁中央がやや内側に張り出すほかは付属施設は確認できない。

出土遺物は縄文時代中期後半の深鉢片、弥生時代後期の壺片・鉢、青磁碗片等があり、出土量は僅少である。

出土遺物は各時期の遺物が混在しており、不明である。



挿図6 33号住居址

②36号住居址（挿図7、

第2図4~6）

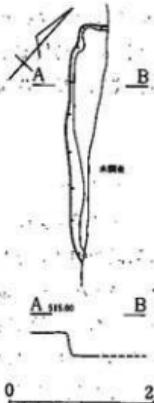
Bトレンチほぼ中央に検出した。大部分は調査区外にかかり、規模等詳細は不明である。また、本址の北西側は近年まで使用されていた水路により一部壊されていた。

南東・北西方向N42.2°Wを示す方形を呈すると考えられる竪穴住居址である。埋土は灰褐色砂である。壁高は25cmを測り、壁の検出された部分では立ち上がりが急である。床面は一部検出したにとどま

り、状態は不明であるが、壁直下はやや軟弱である。

出土遺物は陶器裏・徳利・片口・指鉢、磁器板茶碗・徳利等があり、出土量は僅少である。他に須恵器环小破片が混入出土した。

出土遺物等から近世に属するものとも考えられるが、時期不明である。



(2) 土坑

①土坑14（拝図8）

調査区南側、溝址28と重複し、土坑33～35に近接して検出された。

不整形を呈する。125×105cm、深さ38cmを測る。埋土は黒色土で溝址28と同一であり。新旧関係は不明である。南側はほぼ直に立ち上がるのに対し、北側は緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

拝図7 36号住居址

②土坑15（拝図8）

調査区南側、溝址28・29に近接して検出された。

110×90cmの不整形円形を呈し、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色土である。底部はほぼ平坦で、壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

③土坑16（拝図8）

調査区南東側、溝址30に重複して検出された。

120×80cmの不整形を呈し、深さ54cmを測る。埋土は黒色土で、溝址30との新旧関係は不明である。底部中央で高まりがあり、複数造構の重複の可能性がある。北西壁は内傾して立ち上がる。時期・性格等不明である。

④土坑17（拝図8）

調査区北東側、溝址29を切り、土坑49に近接して検出された。

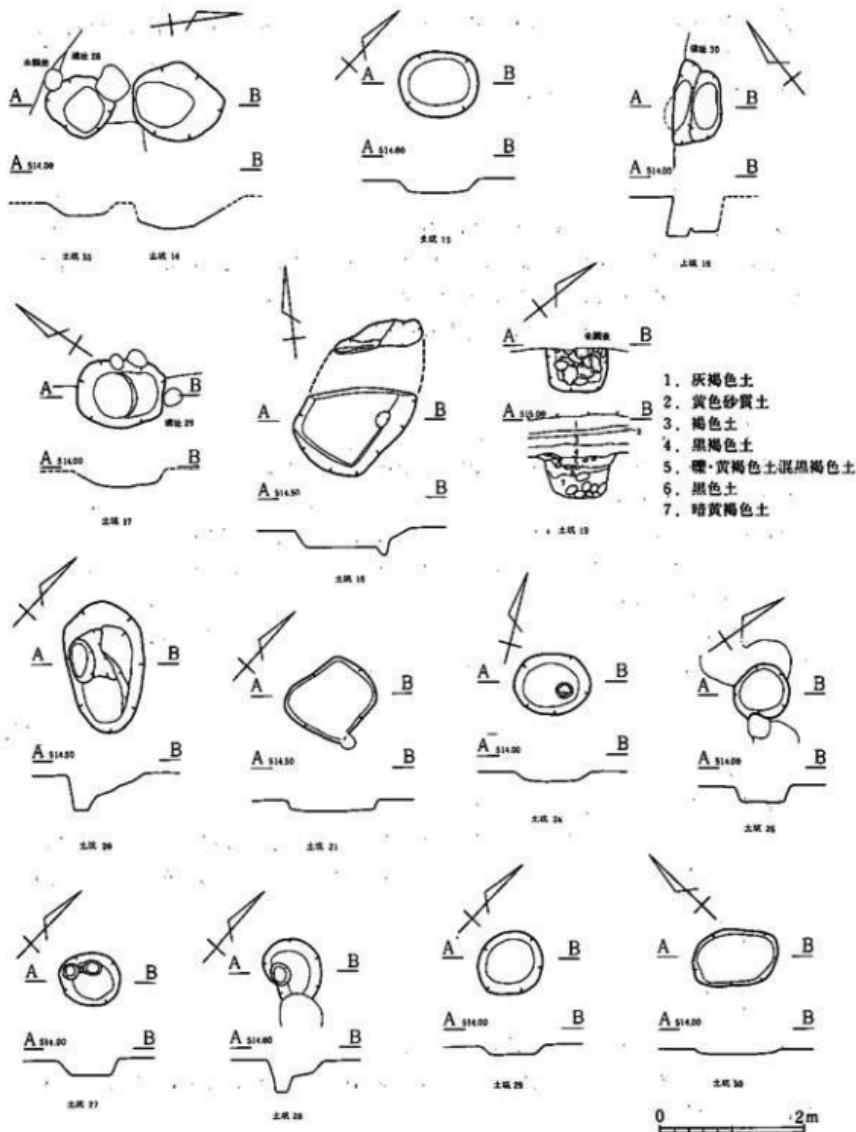


插图 8 土坑14~21·24·26~30·35

柱穴と重複する。120×90cmの不整精円形を呈し、深さ23cmを測る。底部北西側は一段低くなる。北西側はやや緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく時期等不明である。

⑤土坑18（挿図8）

調査区北側、土坑21・52・53、竪穴5と近接して検出された。

擾乱に切られた部分は未掘である。240×140cmの不整形を呈し、深さ24cmを測る。埋土灰色砂である。底部はほぼ平坦であり、東側の壁はやや緩やかに立ち上がる。

出土遺物は陶器壺1片があり、本址の所属時期は中世と思われる。

⑥土坑19（挿図8）

調査区北西側、一部調査区外にかかり竪穴3に近接して検出された。

確認できた一辺の規模は80cmで、プランは長方形を呈するものと思われる。深さ29cmを測り、底部はほぼ平坦である。埋土は上層から黄褐色混黒褐色土・黒色土・暗黄褐色土である。上部には、細かい礫、下部には20~30cm程度の礫が多数入る。下部の礫は花崗岩が主であり、焼けていた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物は平釘等の鉄製品であり、やや下部から出土した。炭・焼土は検出されなかったが、形態等から火葬墓と考えられ、時期は中世に比定される。

⑦土坑20（挿図8）

調査区北西側、竪穴3に近接して検出された。

180×110cmの不整長精円形を呈し、深さ46cmを測る。埋土は褐色土である。底部の状態は凹凸があり、南西側が一番深くなる。南側は急に立ち上がるのに対し、北側の壁は緩やかな立ち上りを示す。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

⑧土坑21（挿図8）

調査区北側、土坑18・溝状址2に近接して検出された。

110×100cmの不整方形を呈し、深さ14cmを測る。埋土は灰色砂である。底部は平坦であり、壁は急に立ち上がる。

出土遺物は陶器土瓶1片であり、本址の時期は中世と考えられる。

⑨土坑22（押図9）

Aトレンチ南東側で検出された。一部調査区外にかかる。

170×95cm、深さ8cmを測る。不整形を呈し、複数土坑の重複とも考えられる。内部に重複する複数の柱穴がある。壁は緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

⑩土坑24（押図8）

調査区西側、竪穴7・溝址31に近接して検出された。

100×80cmの不整円形を呈し、深さ13cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。柱穴が重複する。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

⑪土坑26（押図8）

調査区南西側、土坑28・30に近接して検出された。

80×75cmの不整円形を呈し、深さ22cmを測る。埋土は黒褐色土である。底部はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

時期・性格等不明である。

⑫土坑27（押図8）

調査区南西側、土坑28・30に近接して検出された。

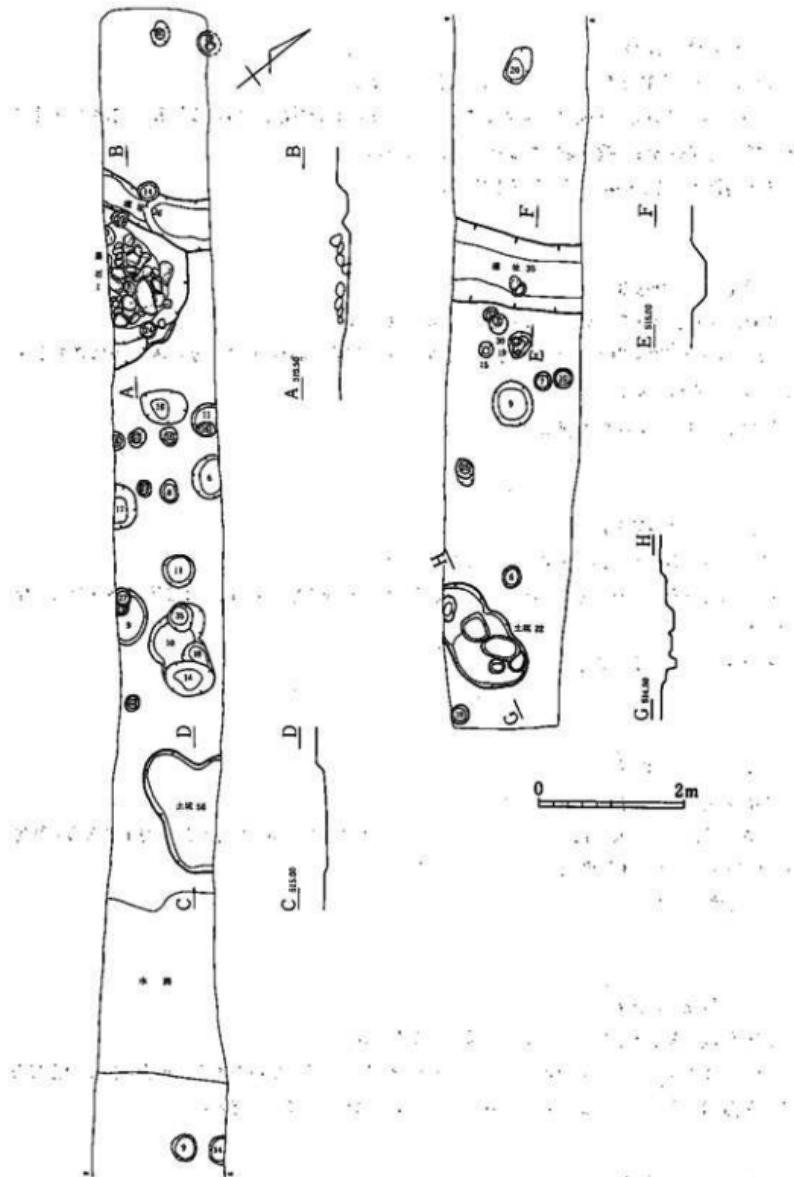
柱穴と重複する。80×70cmの不整円形を呈し、深さ22cmを測る。埋土は黒褐色土である。底部はほぼ平坦で、南西側の壁はやや緩やかに立ち上がる。

出土遺物はない。

⑬土坑28（押図8）

調査区南西側、土坑26・27・30に近接して検出された。

ロームマウンドを切る。(90)×75cmの不整形を呈し、深さ21cmを測る。埋土は黒褐色土である。底部は南西側にやや低くなり、壁の立ち上がりはやや緩やかである。



插図9 Aトレンチ

⑩土坑29（挿図8）

調査区南西側、土坑30・31に近接して検出された。

90×85cmの不整円形を呈し、深さ13cmを測る。埋土は褐色土である。底部はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

⑪土坑30（挿図8）

調査区南西側、土坑26・28～30に近接して検出された。

115×75cmの不整長椭円形を呈し、深さ8cmを測る。埋土黄土混褐色土である。底部はほぼ平坦であるが、中央付近が低い。上部がほとんど削平されており、壁の立ち上がりの状態は不明である。

⑫土坑31（挿図10）

調査区南西側、溝址31に切られて検出された。

(160)×90cmの不整椭円形を呈し、深さ21cmを測る。埋土褐色土で、柱穴が重複する。底部は平坦であり、壁は緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期不明である。

⑬土坑32（挿図10）

調査区南側で検出された。土坑33と重複し、一部調査区外にかかる。

不整形を呈する土坑であり、重複関係等のため規模は不明である。深さは13cmを測る。埋土は褐色土であり、土坑33と同一で新旧関係は不明である。底部はほぼ平坦で、壁は緩やかな立ち上がりを示す。

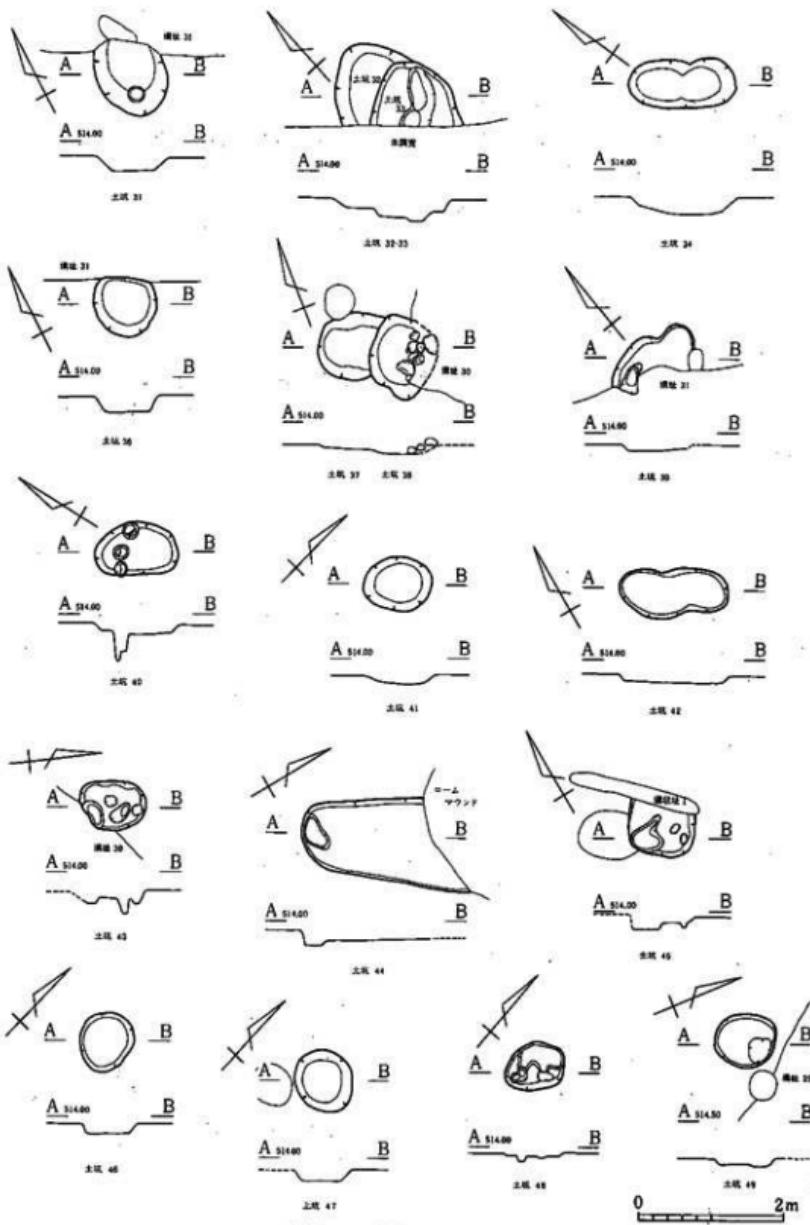
出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

⑭土坑33（挿図10）

調査区南側で検出された。土坑32と重複し、一部調査区外にかかる。

不整形を呈する土坑であり、重複関係等のため規模は不明である。深さは24cmを測る。埋土は土坑32とともに褐色土であり、新旧関係は不明である。内部に重複する複数の柱穴がある。底部はほぼ平坦で、壁は急な立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。



擇図10 土坑31~34・36~39

②土坑34（挿図10）

調査区南側、土坑32・33、溝址28に近接して検出された。

145×65cmの不整形を呈し、深さ26cmを測る。中央でわずかにくびれるため、複数の造構の重複する可能性がある。埋土は褐色土である。底部は中央で最深となり、壁はだらだらと立ち上がる。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

②土坑35（挿図8）

調査区南側調査区際、溝址28に重複し、土坑28に近接して検出された。

85×80cmの不整方形を呈し、深さ14cmを測る。埋土は黒色土である。底部はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。時期・性格等不明である。

②土坑36（挿図10）

調査区南側、溝址31に接して検出された。

90×80cmの不整円形を呈し、深さ20cmを測る。埋土は褐色土である。底部はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

出土遺物はない。

②土坑37（挿図10）

調査区南側、土坑38に重複して検出された。

(100) × 90cmの不整円形を呈し、深さ7cmを測る。埋土は黒褐色土である。底部はほぼ平坦で、壁の立ち上がりの状態は上部が削平を受けて不明である。土坑38との新旧関係は不明である。

②土坑38（挿図10）

調査区南側、溝址30を切り、土坑37に重複して検出された。

100×90cmの不整方形を呈し、深さ9cmを測る。埋土は黒色土で溝址30と同一であり、新旧関係は不明である。南東側に10~30cmの大きさの砾が集中する。底部はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

②土坑39（押図10）

調査区中央、溝址31と重複して検出された。

不整形を呈する土坑で、重複関係のため規模等不明である。深さ8cmを測る。底部はほぼ平坦であり、北西壁の立ち上がりは緩やかである。柱穴と重複する。

③土坑40（押図10）

調査区中央、土坑41・42・44に近接して検出された。

115×75cmの不整長楕円形を呈し、深さ14cmを測る。埋土褐色で、柱穴が重複する。底部は中央が低いもののほぼ平坦であり、壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期不明である。

④土坑41（押図10）

調査区中央、土坑42・43・溝址31・32と近接して検出された。

95×75cmの不整椭円形を呈する土坑で、深さ12cmを測る。埋土褐色土である。だらだらと掘り凹み、底部は中央で最深を測る。

⑤土坑42（押図10）

調査区中央、土坑41・43、溝址30に近接して検出された。

145×65cmの不整形を呈し、深さ11cmを測る。中央がくびれるため遺構の重複も考えられる。埋土褐色土である。底部は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく、時期不明である。

⑥土坑43（押図10）

調査区南東側、溝址30と重複して検出された。

95×65cmの不整形を呈する土坑で、深さ12cmを測る。内部に重複する柱穴がある。壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

◎土坑44（挿図10）

調査区中央、土坑39・40、溝址31・32に近接して検出された。

ロームマウンドに切られるため平面形・規模等不明である。深さ10cmを測る。埋土は褐色土である。底部は平坦で、壁は急に立ち上がる。南西隅に柱穴が重複する。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

◎土坑45（挿図10）

調査区中央、溝状址1と重複して検出された。

南東・北西方向90cmの不整方形を呈し、深さ9cmを測る。埋土は褐色土である。底部はほぼ平坦で、北西壁は急な立ち上がりを示すのに対し、南東壁はやや緩やかに立ち上がる。

時期・性格等不明である。

◎土坑46（挿図10）

調査区中央やや東側、32号住居址・土坑47・溝状址1に近接して検出された。

80×70cmの不整円形を呈し、深さ14cmを測る。埋土は褐色土である。底部はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

出土遺物はない。

◎土坑47（挿図10）

調査区中央やや東側、32号住居址・土坑46に近接して検出された。

90×80cmの不整円形を呈し、深さ16cmを測る。埋土は褐色土である。底部はほぼ平坦で、壁の立ち上がりはやや緩やかである。

◎土坑48（挿図10）

調査区東側、32号住居址・土坑46・溝址29・溝状址2に近接して検出された。

80×65cmの不段形を呈し、深さ9cmを測る。埋土は褐色土である。底部は凹凸があり、壁の立ち上がりの状態は上部が削平されて不明である。

出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

◎土坑49（挿図10）

調査区北東側、土坑17・溝29・溝状址2に近接して検出された。

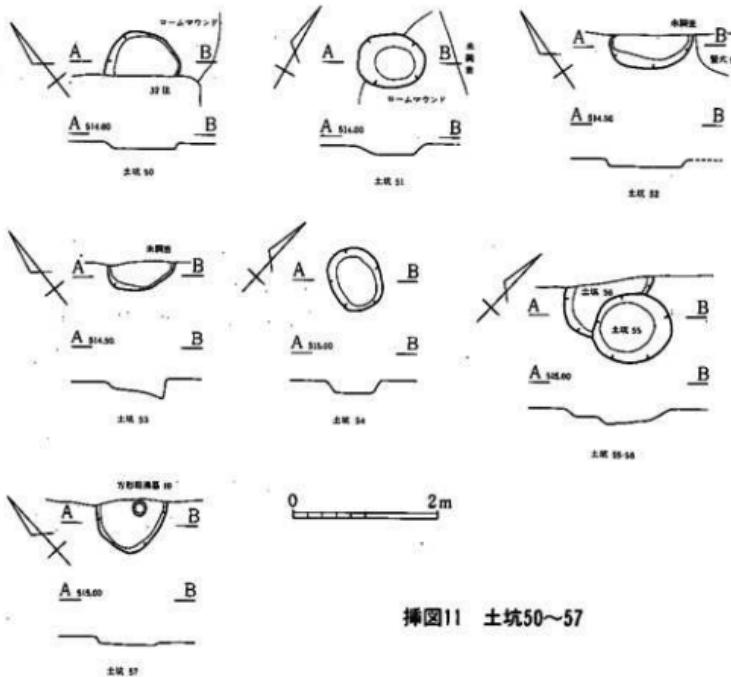
80×75cmの不整円形を呈し、深さ8cmを測る。埋土褐色土である。底部はほぼ平坦であるが、北東側が低い。上部がほとんど削平されており、壁の立ち上がりの状態は不明である。

◎土坑50（挿図11）

調査区東側、32号住居址と重複して検出された。

ロームマウンドを切る。重複のため規模等詳細は不明であるが、平面形は不整円形を呈するものと思われる。深さ8cmを測る。埋土は黑色土であり、35号住居址との新旧関係は不明である。底部は平坦であり、上部がほとんど削平されているため壁の立ち上がりの状態は不明である。

出土遺物はなく、時期不明である。



挿図11 土坑50~57

⑩土坑51（挿図11）

調査区東側で検出された。土坑50・方形周溝墓9と近接して検出された。ロームマウンドを切る。

90×75cmの不整精円形を呈し、深さ11cmを測る。埋土は黒褐色土である。底部はほぼ平坦でだらだらと掘り凹む。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

⑪土坑52（挿図11）

調査区北東側際で一部調査区外にかかって検出された。

土坑53・竪穴9と近接する。規模・平面形等詳細は不明である。深さは10cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

⑫土坑53（挿図11）

調査区北東側際で一部調査区外にかかって検出された。土坑18・52、竪穴5・9と近接する。規模・平面形等詳細は不明である。深さ13～26cmを測る。底部は南東側が最深となり、壁はこの部分で急に立ち上がる。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

⑬土坑54（挿図11）

調査区北東側際、方形周溝墓10に重複し、土坑55・56に近接して検出された。

85×75cmの不整精円形を呈し、深さ17cmを測る。埋土は褐色土である。底部はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

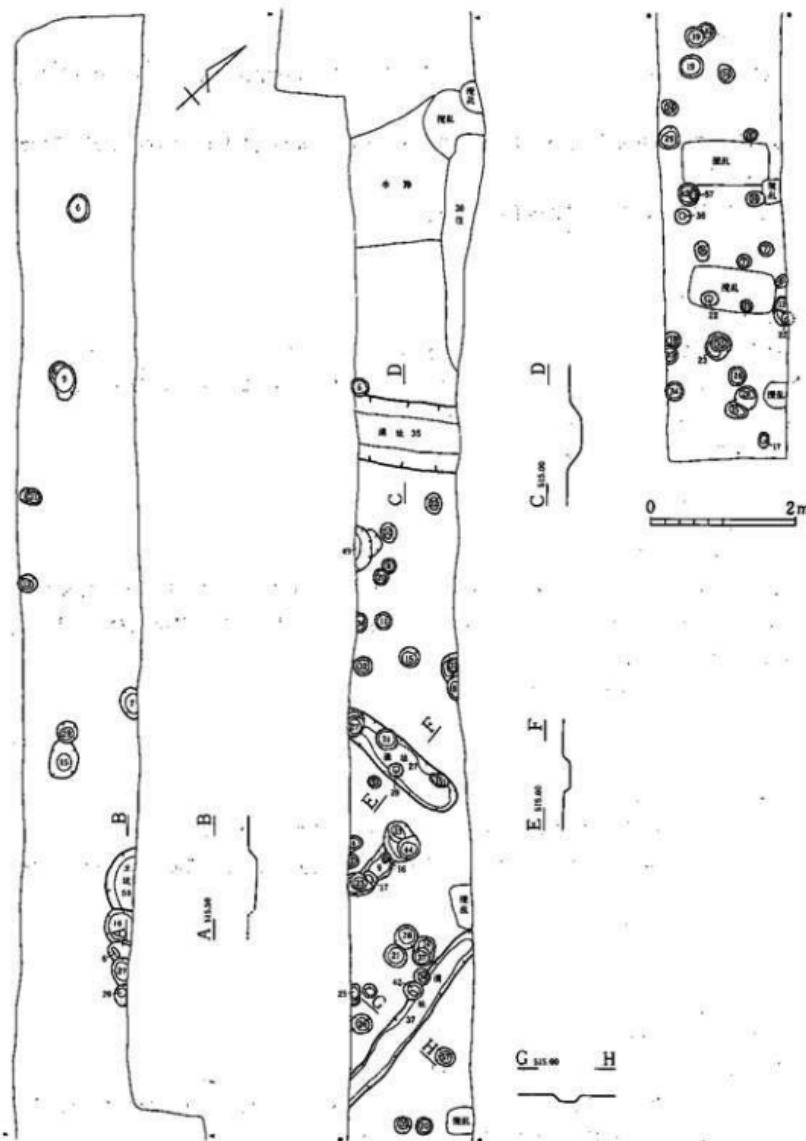
時期・性格等不明である。

⑭土坑55（挿図11）

調査区北東側際、土坑56に重複して検出された。

110×95cmの不整円形を呈し、深さ23cmを測る。埋土は褐色土で土坑56と同一であり、新旧関係は不明である。底部はほぼ平坦で、だらだらと掘り凹む。

出土遺物はない。



挿図12 日トレンチ

①土坑56（挿図11）

調査区北側、土坑55に重複して検出された。

一部調査区外にかかり、規模・平面形等詳細は不明である。深さ9cmを測る。埋土は褐色土である。底部はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

②土坑57（挿図11）

調査区北側、方形周溝墓10に重複し、溝状址3に近接して検出された。

重複のため、規模・平面形等詳細は不明である。深さ8cmを測る。埋土は黒褐色土である。内部に柱穴が重複する。底部はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりの状態は上部が削平を受けて不明である。

出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

③土坑58（挿図9）

Aトレンチほぼ中央で検出された。

不整形を呈する土坑で、調査区外にかかり規模・平面形等詳細は不明である。深さ14cmを測る。底部はほぼ平坦であるが、南東側がやや低くなる。だらだらと掘り凹められる。

④土坑59（挿図12）

Bトレンチ中央北西寄り、一部調査区外にかかって検出された。

規模・平面形等詳細は不明である。深さ12cmを測る。底部は平坦であり、壁は緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はなく、時期不明である。

(3) 壺 穴

①壺穴3（挿図13）

調査区北西側、34号住居址・土坑19・20と近接して検出された。

2.6×1.7mの隅丸長方形を呈する壺穴で、深さ10~29cmを測る。底面は平坦で、壁下を除くほぼ全面が硬く締まる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土黒色土の一層である。

出土遺物は土師器壺小破片1片のみで、時期・性格等不明である。

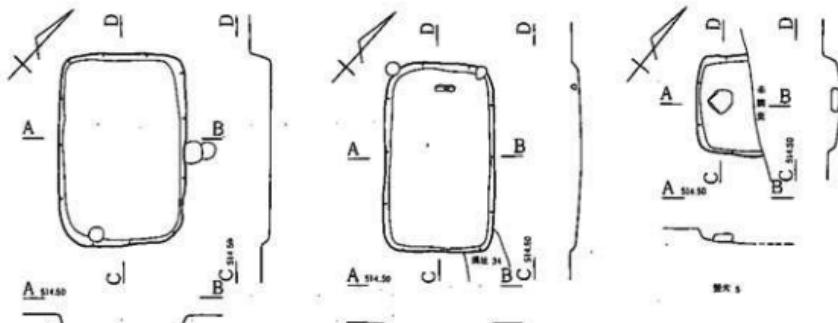


図13-3

図13-4

図13-5

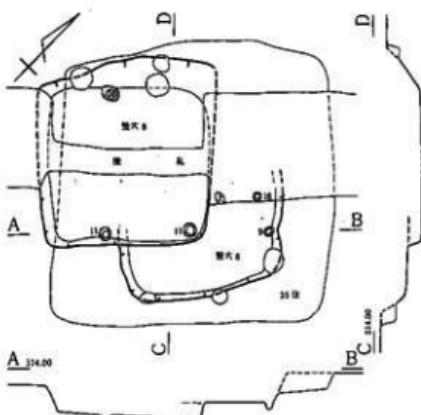


図13-6-3

0 2m

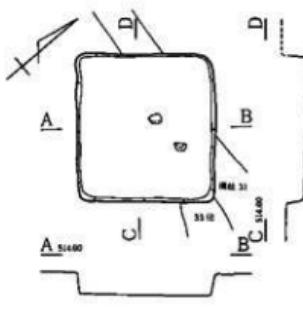


図13-7



図13-8

1. 暗褐色土
2. 黄褐色砂質
3. 灰色砂質
4. 黑褐色土
5. 黑色土
6. 黄土ブロック混黑色土

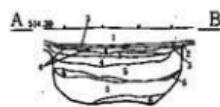


図13-9

挿図13 穴3～9

②竪穴4（挿図13）

調査区中央やや西寄り、溝址34と重複し、34号住居址に近接して検出された。

2.55×1.5mの隅丸長方形を呈する竪穴で、深さ7～13cmを測る。底部は平坦で、壁の立ち上がりの状態は検出面から浅いため不明である。埋土里色土の一層である。形態・埋土等竪穴3と共に通する。

出土遺物は縄文時代中期土器片、底部回転糸切りされる須恵器坏片の2片で、竪穴3と同様、時期・性格等不明である。

③竪穴5（挿図13）

調査区北側、土坑18・53と近接し、調査区外にかかって検出された。

ほぼ（長）方形を呈すると考えられ、南東・北西方向130cm、深さ10～18cmを測る。埋土は灰色砂である。底面はほぼ平坦であるが、中央付近が深い。壁の立ち上がりはやや急である。南西壁際に30cm大の扁平な礫が出土した。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

④竪穴6（挿図13）

調査区西側、35号住居址を切り、竪穴8に切られて検出された。北西側は近年まで機能していた水路に壊されており、確認できない。

南西・北東方向2.2mの不整方形を呈し、深さ42cmを測る。埋土は黄土混褐色土である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

出土遺物は縄文時代中期土器片、弥生時代後期甕片、灰釉陶器碗片、陶器鉢・擂钵片があるが、時期・性格等不明である。

⑤竪穴7（挿図13）

調査区西側、33号住居址・溝址31を切って検出された。

2.0×1.9mの方形を呈し、深さ30cmを測る。埋土は漆黒土である。底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。付属する柱穴はなく、礫が2点検出された。

出土遺物には縄文時代中期後半の土器片、弥生時代後期の受け口状口縁の壺計3片があるが、混入と考えられ、時期不明である。

⑥竪穴8（挿図13、第2図7）

調査区西側、35号住居址・竪穴6を切って検出された。

近年まで機能していた水路と重複するが、壊されていた部分は本址底部付近で中央部の幅40cm程度である。2.5×2.3mの不整方形を呈し、深さ37cmを測る。埋土は黄土混黒褐色土である。底部は南東側がやや低くなっている、凹凸はない。壁の西半はやや緩やかな立ち上がりであるが、東半の立ち上がりの状態は急である。壁直下に柱穴3ヶが検出されており、底部レベルが描う等本址に伴うものと考えられる。

出土遺物は弥生土器壺、土器器表、青磁花瓶、陶器壺・皿・擂鉢・土鍋、磁器皿、飯茶碗の僅少であり、時期・性格は不明である。

⑦竪穴9（挿図13）

調査区北東側、土坑17・52、溝址29に近接して検出された。調査区外にかかる。

不整（長）方形を呈すると考えられる竪穴で、南東・北西方向1.8m、深さ82cmを測る。埋土は上部が灰色砂質・黒褐色土の互層、下部が黑色土・黄土ブロック混黒色土の互層である。底部はやや凹凸があり、壁の立ち上がりは上部が直なのに対し、下部はだらだらと底部に連続する。

出土遺物は磁器小破片1片のみであり、時期・性格等不明である。

（4）方形周溝墓

①方形周溝墓9（挿図14、第2図8～10）

調査区東側隅、大部分が調査区外にかかって検出された。

全体の規模等詳細は不明であるが、周溝の幅は70～100cm、深さ27～69cmを測る。北西辺の方向N35.5°Eを示す。周溝の断面形は南西側が底部平坦で壁が緩やかに立ち上がるのに対し、北西辺は丸底で壁上部が開く形状を呈する。埋土は上部から黑色土・黒褐色土・褐色土である。

出土遺物は弥生土器壺・壺7片である。壺は肩部に1/4弧文が施される。壺は櫛描波状文+斜走短線が施され、内面ヘラナデ・外面刷毛目調整される。他に壺底部片がある。

時期は出土遺物から弥生時代後期に比定される。

②方形周溝墓10（挿図14、第2図11・12）

調査区北側隅、大部分が調査区外にかかって検出された。また、南東辺は近年まで機能していた水路により壊されており、確認できない。

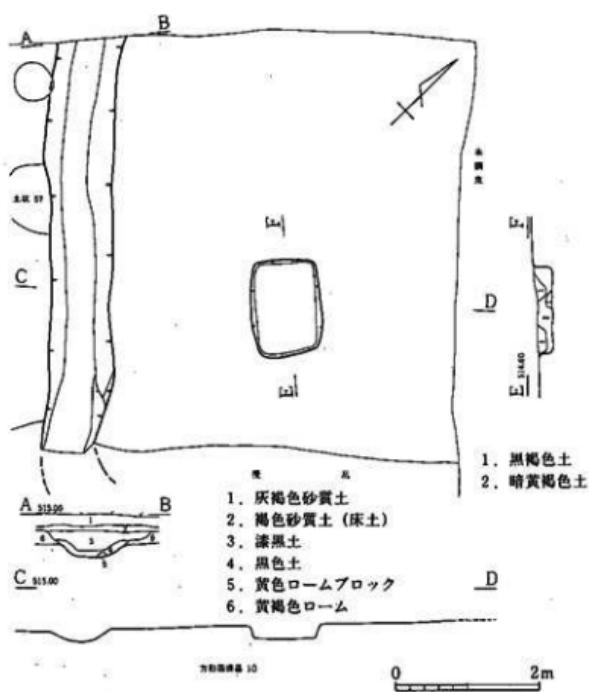
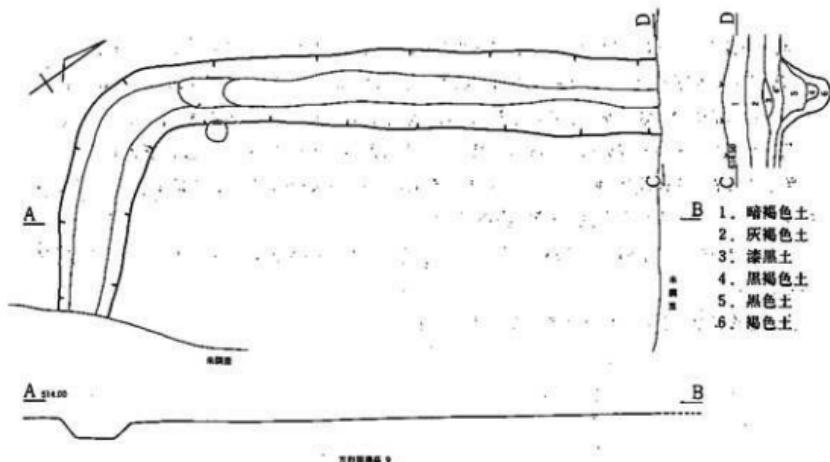
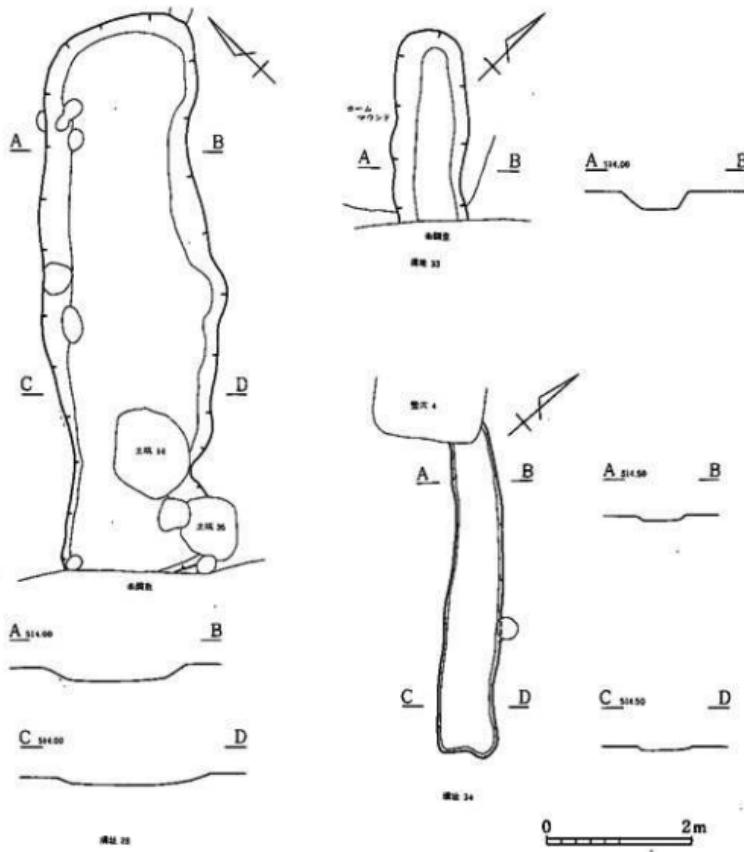


Figure 14 方形周溝墓 9・10

全体の埋蔵等詳細は不明であるが、主体部と考えられる長方形を呈する掘り込みがあることから方形溝墓と判断した。周溝の幅は90cm、深さ17cm程度を測る。南西辺の方向はN45°Wを示す。周溝の底部はやや丸底状を呈する。上部はかなり削平を受けているが、土層断面からみると、既に調査されている方形周溝墓1と同様、だらだらとした掘り込みである。埋土は上部から漆黒土・黒色土である。主体部は130×95cmの不整方形を呈し、深さ26cmを測る。底部は平坦で、壁は直に立ち上がる。埋土は黒褐色土・暗黄褐色土である。

出土遺物は弥生土器壺4片である。胎土に鉄石英・粗大な石英を含み、振り幅の大きな波状文が施文される。

出土遺物等から弥生時代後期のものと考えられる。



挿図15 溝址28・33・34

(5) 溝 址

①溝址27（挿図12）

調査区中央南東寄り、溝址35・37の中間で検出された。

調査区外にかかり、規模等詳細は不明である。幅50cm、深さ8cmを測る。底面は平坦である。
出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

②溝址28（挿図15、第3図1）

調査区南側、土坑14・35と重複し、溝址30に近接して検出された。

南西側は一部調査区外にかかるが、総延長はおおむね7.5mを測る。幅は1.55～2.5mとばらつきがあり、深さ11～24cmである。長軸方向はN44°Eを示す。底部は中央で最深を測り、壁はだらだらと立ち上がる。埋土黒色土である。

出土遺物は外面ヘラミガキが施される弥生土器壺底部片（第3図1）のみである。

出土遺物は混入と考えられ、時期・性格等詳細は不明であるが、溝址30と形状・方向等類似しており、おそらく区画施設として機能したものと考えられる。

溝址30が中世以降と考えられる溝址29に切られることから、本址の時期は中世に属するものといえよう。

③溝址29（挿図16、第3図2～4）

調査区南東～東～北東側、32号住居址・溝址30を切って検出された。

鉤形を呈しており、総延長30mを測る。屈折部および南東端は幅を減じるが、おおむね幅80～100cm、深さ10cmを測る。長軸方向は南東部でN40.3°E、北東部でN40.5°Wを示す。底部中央に最深部があり、壁の立ち上がりは緩やかである。底部のレベルは北東端で標高513.93m、屈折部で同513.73m、南東端で同513.60mと南東側が低い。埋土は黒褐色土で、砂粒等は認められない。

出土遺物は青磁花瓶（第3図2）、陶器碗（3）、瓦器（4）3片である。

水の流れた痕跡は認められないものの、西東側に低く幅がほぼ一定であり、また鉤形を呈することから用水路と考えられる。

詳細時期は不明であるが、出土遺物から中世以降と考えられる。

④溝址30（押図16、第3図5～8）

調査区南東側、土坑38・溝址29に切られ、土坑16・43および溝址31と重複して検出された。長さ15.4m、幅1.6～2.0m、深さ9～39cmを測り、長軸方向はN46.9° Eを示す。おむね長方形を呈し、壁はだらだと立ち上がり、底部中央に最深部をもつ。北西側は近年まで機能していた水路に壊されており、確認できない。南西・北東方向2.2mの不整方形を呈し、深さ42cmを測る。埋土は黄土混褐色土である。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

出土遺物は縄文時代中期土器片、弥生時代後期甕片、灰釉陶器碗片、陶器鉢・摺鉢片の僅少であり、時期・性格等不明である。

⑤溝址31（押図16、第3図9）

調査区南側、33号住居址を切り、竪穴7に切られて検出された。土坑31・36・39、溝址30と重複し、溝址32と分岐する。西端は調査区外にかかり、また、竪穴7より西側は重機による削平を受けて調査できなかった。

幅45～85cm、深さ3～18cmを測り、確認された部分の比高差はわずか7cmで、東側が低い。長軸方向はN74°Wを示す。埋土は黒褐色土で、水の流れた痕跡はない。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。溝址35と一連と考えられることから、水の流れた痕跡はないものの水路と考えられる。

出土遺物には弥生時代後期の甕片4、硬砂岩素材の剥片石器（第3図9）があるが、いずれも混入と考えられ、本址の所属時期は不明である。

⑥溝址32（押図16）

調査区南側、溝址31と分岐して検出された。

分岐点から4.4mで途切れる。幅30～40cm、深さ5～11cmを測り、溝址31との比高差は約10cmで、溝址31が低い。埋土は溝址31と同様、黒褐色土で、水の流れた痕跡はない。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

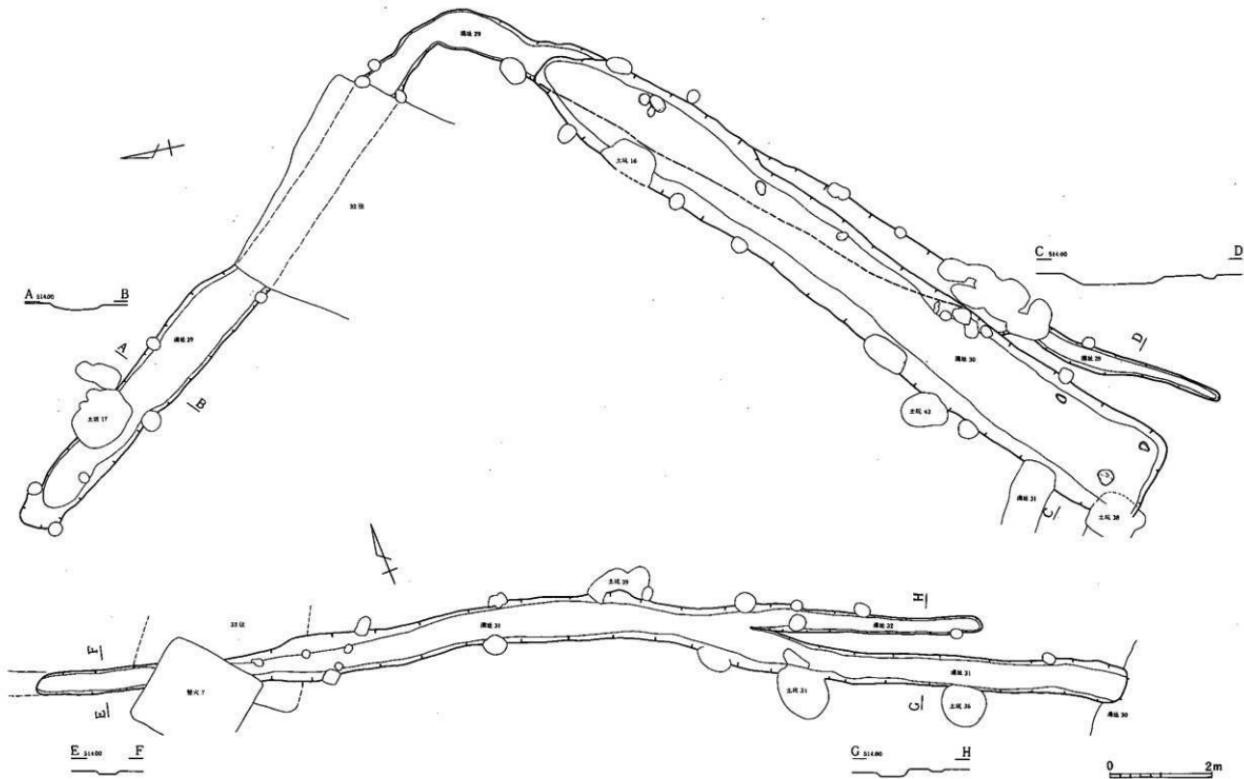
出土遺物はなく、本址の所属時期は不明である。

⑦溝址33（押図15）

調査区南東側、ロームマウンドを切り、一部調査区外にかかるて検出された。

確認された部分の長さは2.6m、幅1.0m、深さ12～24cmを測る。長軸方向はN46.6° Wを示す。埋土は黒褐色土である。底部はやや丸底状を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。



挿図16 溝址29~32

⑧溝址34（押図15）

調査区南東側、竪穴6に切られて検出された。

確認された部分の長さは4.7m、幅55~75cm、深さ4~8cmを測り、長軸方向はN48.1°Wを示す。南東端は角張っている。壁の立ち上がりの状態は不明であり、底部はほぼ平坦である。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

⑨溝址35（押図9・12）

A・Bトレンチで検出された。

一部を調査したのみであり、詳細は不明である。A-Bトレンチは離れているものの、ほぼ延長に位置しており、また形態等類似することから同一の溝址と判断した。幅90cm、深さ19~25cmを測り、確認された部分の比高差は28cmで、Aトレンチ側が低い。だらだらと掘り凹み、底面は平坦である。

出土遺物は縄文時代中期の無文片1点のみであり、時期は不明である。

⑩溝址36（押図9）

Aトレンチで検出された。

集石1に切られているが、一部を調査したのみであり、詳細は不明である。幅40~65cm、深さ9~20cmを測り、底面の状態は一様でない。壁はやや緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく、本址の所属時期は不明である。

⑪溝址37（押図12）

Bトレンチ南東側で検出された。

幅30cm、深さ約10cmを測る。確認された部分の比高差は6cmで、北側が低い。底部はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。長軸方向は溝址27と直交方向をとる。中央東壁側から多量の鉄片が出土したが、原型をとどめず、器種は不明である。

出土遺物は他になく、時期・性格等不明である。

(6) 溝状址

①溝状址 1 (挿図17)

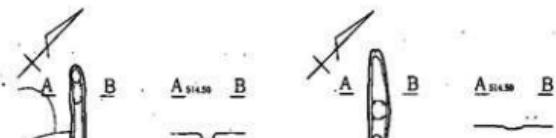
調査区中央、土坑45~47付近で検出された。

長さ4.5m、幅20cm、深さ約10cmを測る。長軸方向はN44.5°Wを示す。中途で途切れしており、底面はほぼ平坦であるが、ところどころ凹みがある。埋土褐色土である。溝状址2・3のほぼ方向を描え、殊に溝状址2の南東半と並んだ位置にあることからこれらと一連のものであると考えられる。

出土遺物はなく、

時期・性格等不明で

ある。

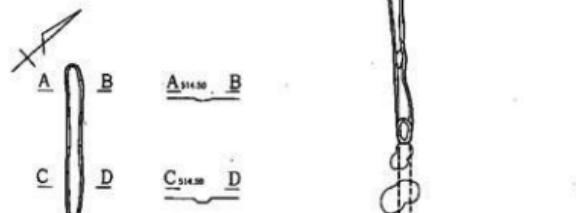
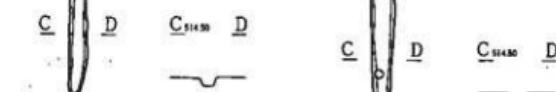


②溝状址 2 (挿図17)

調査区北東側、土坑21・48・49、溝址28に接して検出さ
れた。

長さ9.9m、幅20
~30cm、深さ約5cm
で、長軸方向はN47.
8°Wを示す。底部
はほぼ平坦で、埋土
褐色土である。

出土遺物はなく、
時期・性格等詳細は
不明である。



③溝状址 3 (挿 図17)

調査区北側、土坑
57・方形周溝基10に

挿図17 溝状址 1・2・3



近接して検出された。

長さ2.1m、幅20cm、深さ約5cmで、南東端より10cm程低い。長軸方向はN47.9°Wを示す。底部はほぼ平坦で、埋土褐色土である。

出土遺物はない。

(7) 集石

①集石1（押図9）

Aトレント北西端、溝址36を切って検出された。

調査区外にかかる全体を調査しておらず、平面形・規模等詳細は不明であるが、大きさは2m前後かと思われる。掘り方底部まで20cm程度を測り、10~50cmの大きさの礫がおむね二層に積み重なっていた。花崗岩が主である。

出土遺物は弥生土器壺片1のみであるが、混入と考えられ、時期等不明である。

(8) その他

①柱穴（押図18~24）

調査区のほぼ全面にわたって、径20~50cmの柱穴がたくさん検出されている。大部分が建物址・櫛址等を構成するものと考えられるが、規則性は見い出せず、詳細は不明である。これらのうち、方形周溝墓10南西側、溝状址1・2中間等いくつか集中する箇所がみられる。埋土は黒褐色土・褐色土がほとんどで、規模の大きいものに褐色土、小さいものに黒褐色土が多い。出土遺物はほとんどなく、時期等不明である。

②遺構外出土遺物（第3図10~第5図、第6図1・5）

A 土器

a 繩文時代中期（第3図10~20）

該期の遺物はほとんどが小破片であり、出土量は少ない。沈線ないし隆沈線により区画文が施され、区画文内部に繩文・結節繩文が施文される。時期は中期後半に比定される。

b 繩文時代後期（第3図21）

第3図21は器面調整・施文から後期に属すると考えられるが、詳細は不明である。

c 弥生時代中期（第4図1）

口縁外縁に円形浮文・櫛描刺突文、以下横位および縦位に櫛描条線文が施される壺で、胎土に細かい石英を含む。

d 弥生時代後期（第4図2～11）

壺（第4図2～6）・壺（6～10）・高坏（11）が出土している。壺（3）は受け口状を呈し、竪穴7から混入出土した。壺の頸部文様は櫛描横線文+斜走短線（4）、波状文+櫛描横線文+½弧文（5）、櫛描横線文+½弧文（6）等ある。壺（9）は外面刷毛目調整が看取される。

e 中世（第4図12～15）

天目茶碗（第3図12～15）、皿（13）、指鉢（14・15）等がある。天目茶碗は内面に鉄锈が付着する。陶器皿はところどころに粘土屑が付着している。15は底部回転糸切り後ナデ調整される。

f 近世（第4図16・17）

陶器ぐい呑（第4図16）、磁器染め付け皿（第4図17）等少量がある。16は見込みに「十九」の墨書きがある。

B 石器（第4図18～第5図）

石器は詳細時期等不明であり、形態に基づいて記述する。

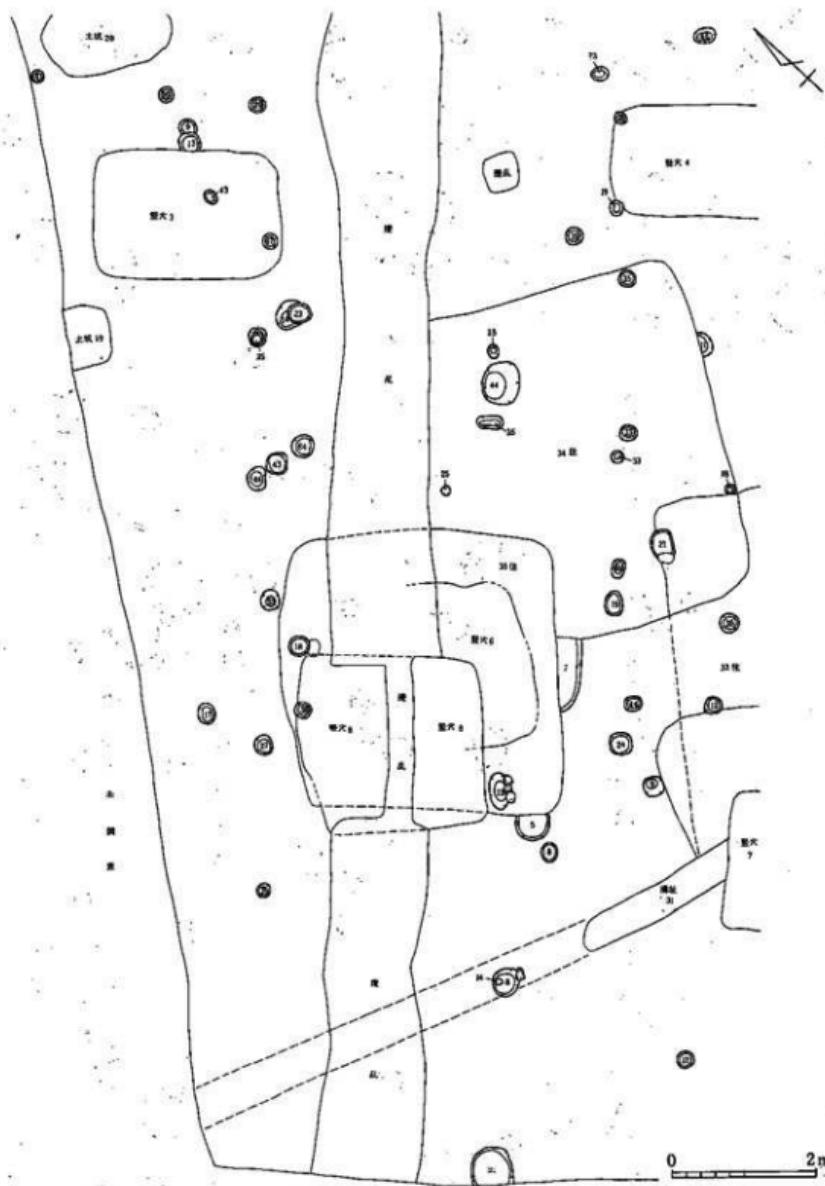
第4図18～20は硬砂岩製の小型の打製石器で、18は刃部に磨滅が認められる。第5図1は同じく硬砂岩素材で表裏面に敲打が施される。

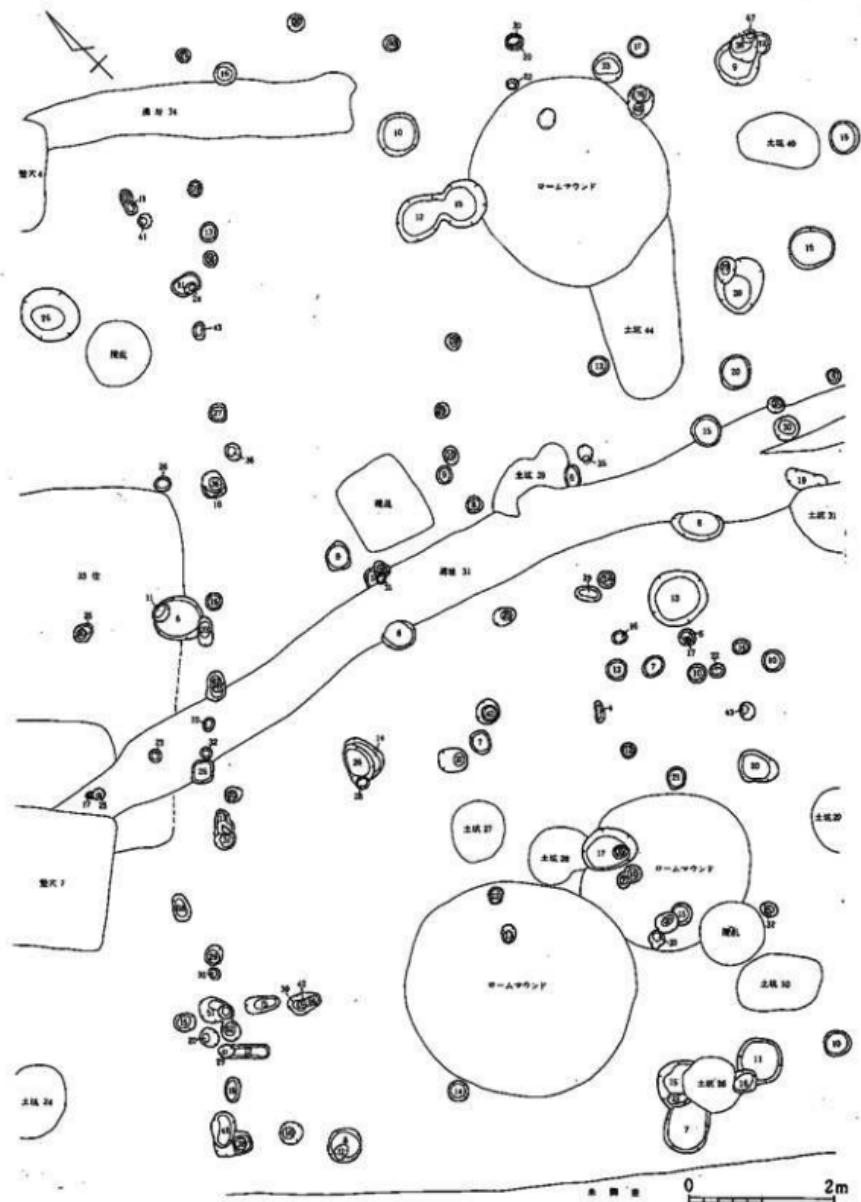
敲打器（2・3）は上ないし下端に作業痕と思われる敲打痕および剥離痕が認められる。5・2は安山岩、3は凝灰岩素材である。

4～6は砥石と考えられるもので、いずれも当擦型である。

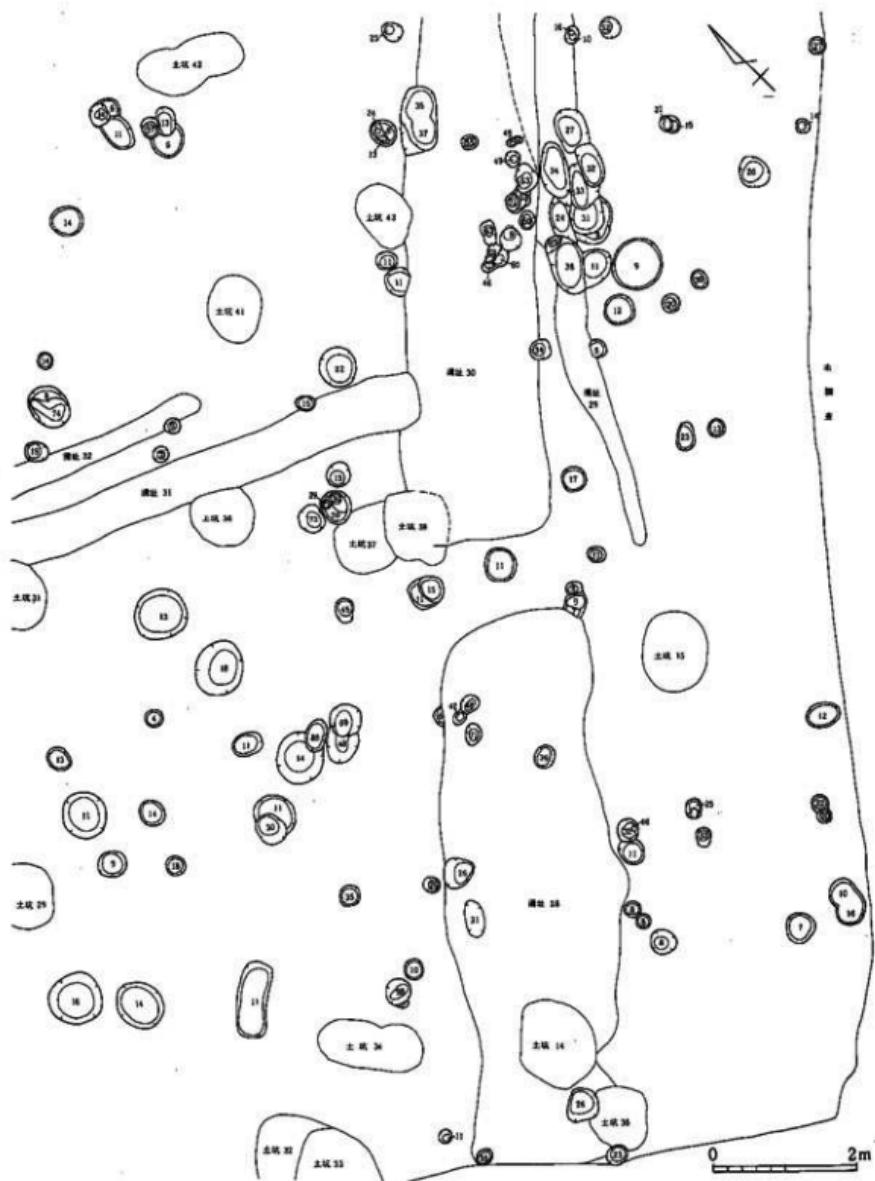
C 金属製品（第6図1・5）

第6図1は刀の束と考えられ、鉄芯銅装である。銅装は遺存状態が不良である。5はBトレチから出土した鉄製品である。錆化が進み、また遺存状態は悪いが、片側に釘穴と考えられる方の穴が3ヶあり、形態から蹄鉄と思われる。

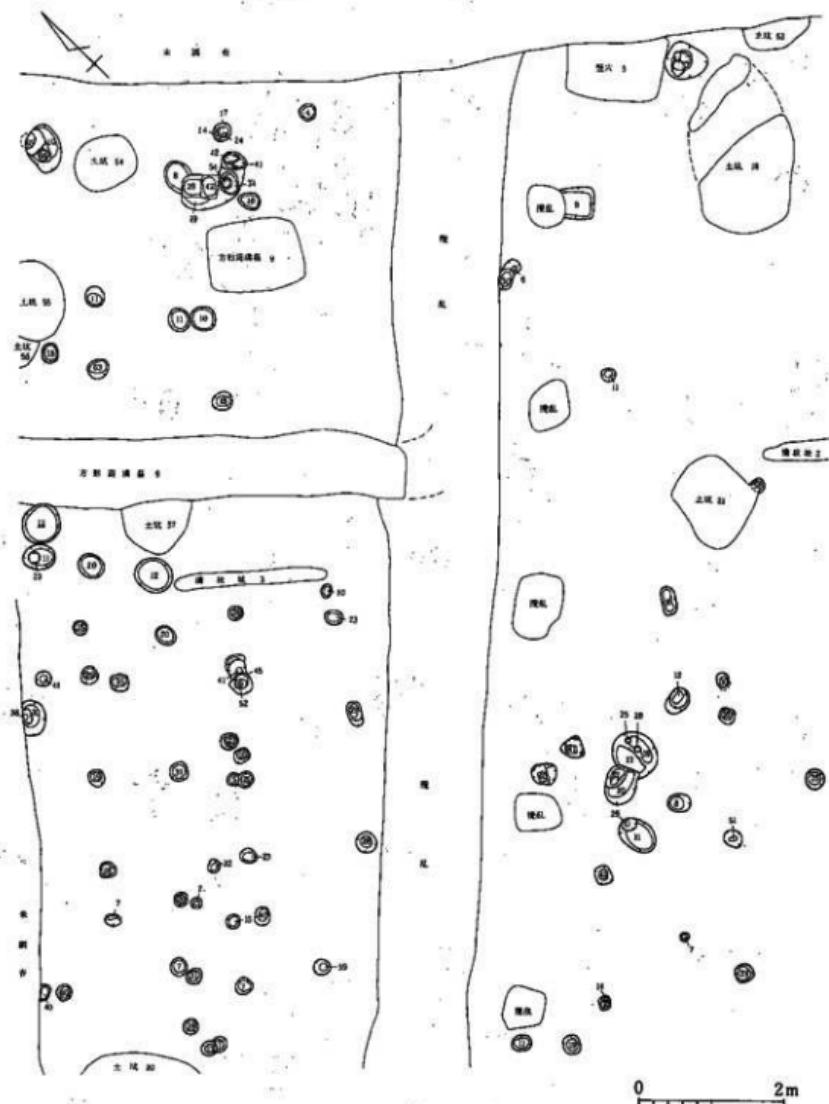




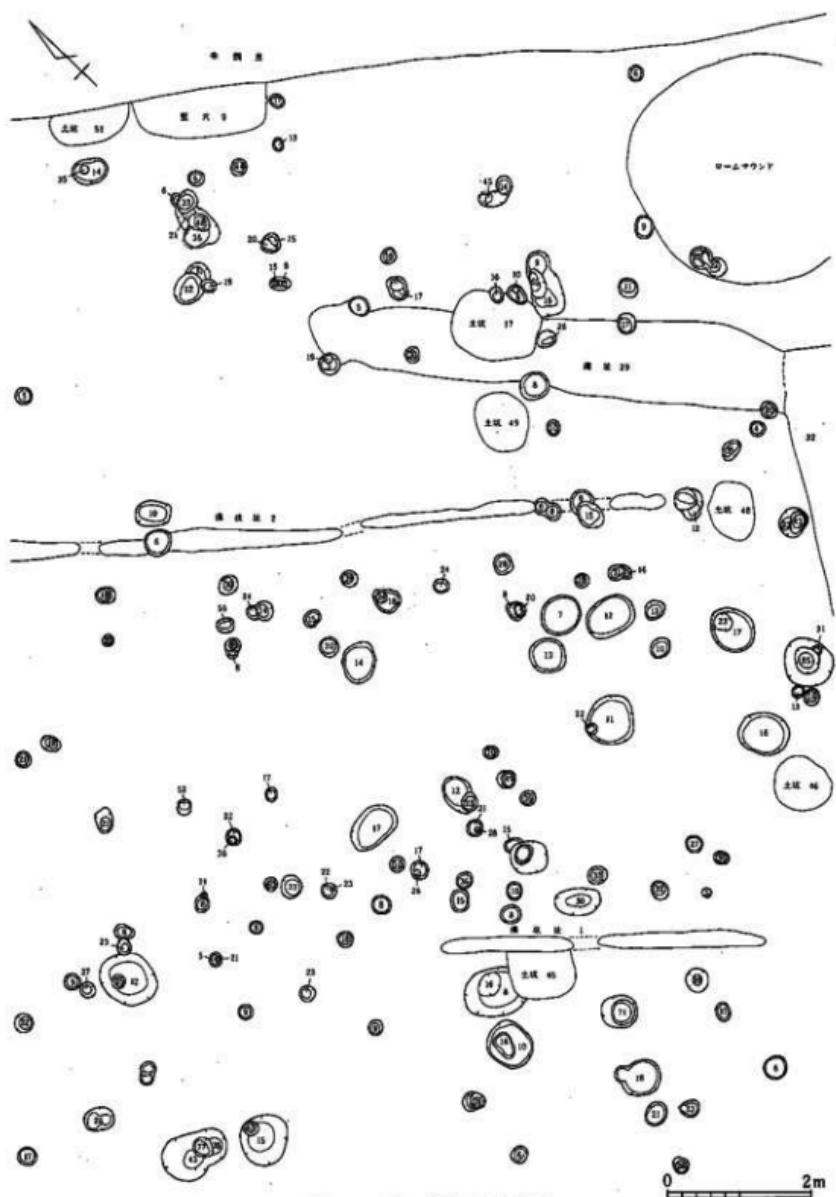
挿図19 周辺柱穴平面図(2)



插図20 周辺柱穴平面図(3)



插図21 周辺柱穴平面図(4)



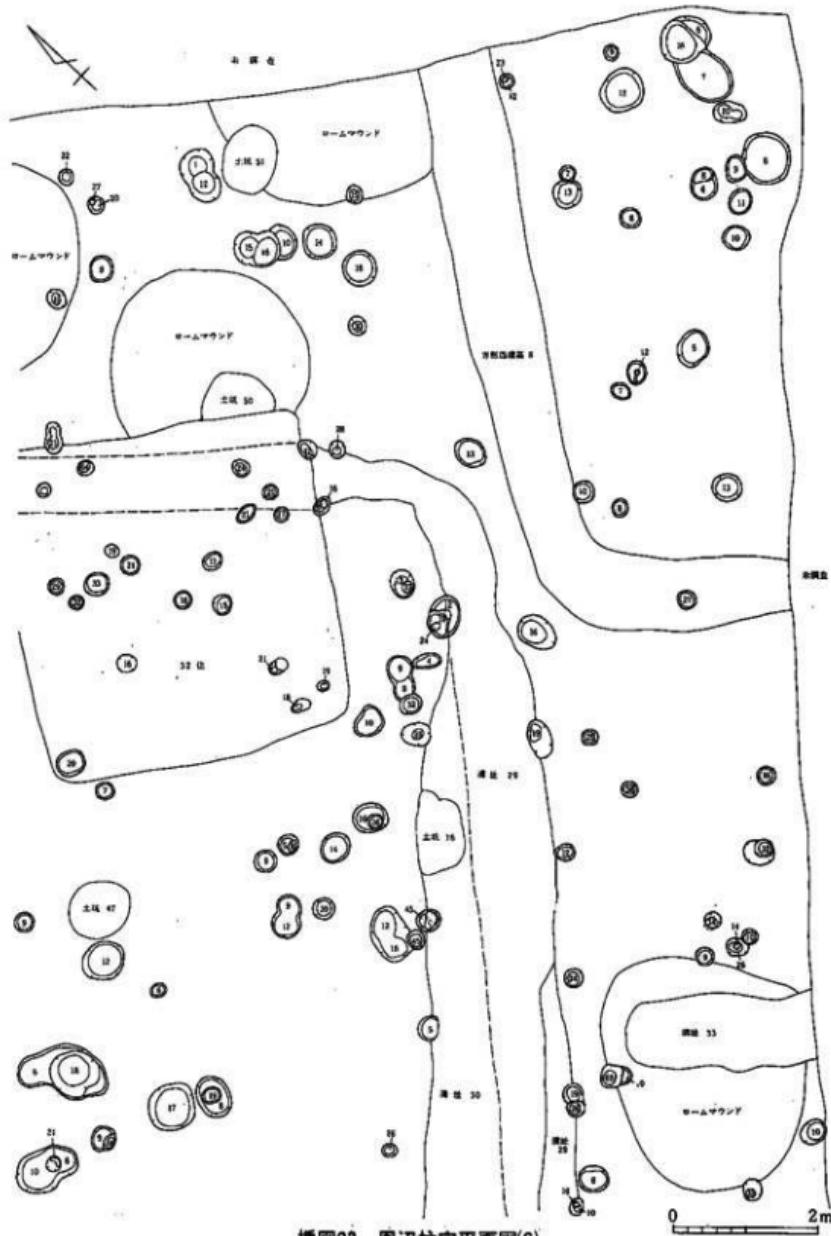


図23 周辺柱穴平面図(6)

IV まとめ

今次調査地点周辺では、これまで数次にわたる緊急発掘調査が実施されており、数々の調査成果が積み上げられてきた。その結果、本遺跡の消長や性格もある程度具体的に描出できる段階に至っている。とはいっても、調査された面積は遺跡の一部分にすぎず、遺跡の全体像を把握するには尚早と言わざるを得ない。今次調査で検出された遺構・遺物は前述のとおりであり、これまでの調査成果を時代を追って整理して総括したい。

(1) 繩文時代

今次調査では縄文時代の遺構は検出されておらず、遺物も僅少である。当遺跡においてはこれまでに縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての竪穴住居址が6軒調査されており、坂田・下伊那でこれより古い時期の竪穴住居址の調査例がほとんど単純なのと対照的である。既に指摘されているとおり、同時期の豊丘村田村原遺跡、高木村伊久間原遺跡等とともに定着した集落の姿を見て取ることができる。

調査前には一般国道153号坂田バイパス路線北西側の尾根状の微高地に該期集落の展開が予想され、今次調査地点は4~8号住居址と9号住居址の間に位置したわけであるが、遺構はおろか遺物すら確認できなかった。このことは市道運動公園通り路線内で調査された4~8号住居址の遺構配置から考えられる集落の繼続の他に、地点を異にした集落変遷を示唆するといえる。また、市道運動公園通り路線西側は未調査のため即断はしかねるが、隣接する店舗建設用地の緊急調査結果とあわせて、今次調査地点周辺は該期遺構の空白部分に相当すると考えられる。すると、集落の規模は比較的小さいともいえる。

他の時期についてみると、中期後半の遺物が若干出土しているものの遺構に伴うものは皆無といえる。検出された土坑の中には該期の遺構が少なからずあると考えられるが、詳細は不明である。今次調査のみでなく、これまで行なわれた周辺部での調査でも竪穴住居址等の主要な遺構は未確認であり、こうした遺構の不在は今次調査地点周辺が集落の縁辺部に相当する可能性を低くする。本遺跡周辺では、西方に位置する伊賀良西の原遺跡において竪穴住居址の確認例があり、その一帯に集落の中心域のあったことが推測され、地域的な中心地は、西方の山麓ぎわにあったといえる。後期に至っても遺構・遺物の疎な分布状況は変化しておらず、当該地以外にその中心を求めるを得ない。

(2) 弥生時代

続いて、本遺跡で先人達の主体的な活動の痕跡が確認されるのは、弥生時代後期になってのことである。これまで27軒の竪穴住居址と10基の方形周溝墓等が調査されており、本遺跡を代表する時期といえる。27軒の竪穴住居址は後期前半の座光寺原式期にはじまり、後期全体を通じての集落といえる。そして、後期終末を最後に、以降途絶えている。出土遺物が少ないとから各遺構の詳細な時期の検討は不十分であるが、集落の発展・衰退していく様が窺える。こうした集落の状況は、一般国道153号飯田バイパス先線の一色遺跡でも確認されている。

一方、遺構分布についてみると、これまで調査された部分は遺跡のごく一部であるが、竪穴住居址・方形周溝墓・溝址等の分布状況から、いくつかの遺構群に括ることができよう。各遺構の時期が詳らかでない状態ではあるが、個々の遺構群が時期を異にするというよりは、各遺構群毎に変遷があると考えられる。遺構数の増減にみられる集落の消長の他に、本遺跡においては竪穴住居址の疎な分布状況が看取される。集落の数時期の変遷を考慮すれば、なお顕著であるといえる。

弥生時代後期終末における高位段丘上の集落の廃絶は、いかなる社会的状況に起因するのであろうか。すでにみたとおり、弥生時代後期に営まれた高位段丘上の集落は、その生産基盤を尾根の南北両側に展開する低湿地を利用した稻作と乾燥台地の畑作に求めたと考えられる。その背景は人口の急激な膨張とされており、後期終末の突然の廃絶は人口増加の終息で説明しにくせるものではない。この時期に中・低位段丘の集落が急速に発展することからすれば、人々の高位段丘から中・低位段丘への移動があったといえる。こうした移動を促したものの中・低位段丘の生産性の向上であり、集約的な水田經營の受容と労働力の再編を成し得る勢力が成長する姿が浮かび上がる。古墳時代前期の集落が竜丘・松尾・座光寺地区の中・低位段丘に集中することはそうじた波が天竜川沿岸部から始まったことを示しており、これらの地域は以後指導的な役割をはたしたといえる。

いずれにせよ、本遺跡は中・低位段丘の遺跡と比較することで、異なった生業形態をとる初期農耕社会のふたつの形態を明らかにするといえ、同時に次代にかけての社会情勢の大きな変貌を解明する上で貴重といえる。

(3) 中世

弥生時代以降、本遺跡では中世まで人々の居住した痕跡は見い出せない。この間の土地利用状況は不明であるが、弥生時代から引き続いて畑作および小規模な稻作といった生産活動が行なわれたと考えられる。

古代末には本遺跡周辺に伊賀良庄が置かれ、鎌倉時代には北条江馬氏の地頭代四条金吾が居を構えた「とのおか」が伊賀良殿岡地籍に求められている。伊賀良殿岡地籍は本遺跡とは毛賀沢川を挟んで指呼の間にあり、重要な役割を果たしたことは想像に難くない。詳細な時期は不明であるが、区画施設として機能したと考えられる溝址28・30がこの時代のものとすれば、溝址北西側に展開する柱穴群とともに、中世前半の居館址が存在するとも考えられる。しかし、溝址を含めて該期の資料は断片的であり、その存否も不明と言わざるを得ない。

また、室町時代には伊賀良庄地頭を引き継いだ小笠原氏が隆盛を極め、戦国時代には鈴岡・松尾城にその居が置かれた。その著しい勢力伸長の基盤として、松尾城に隣接する本遺跡が果たした役割は大きかったことが考えられる。特に方形堅穴といわれる堅穴は、これまで市内では座光寺恒川遺跡・追手町飯田城跡・松尾南の原遺跡・鼎名古熊下遺跡で調査されており、恒川遺跡・名古熊下遺跡とは城跡から隔たった一般の遺跡という点で共通している。規模が小さく、飯田城跡・松尾南の原遺跡といった城跡で検出されていることから軍事的色彩が強い構造とも考えられ、中世後半期の松尾城を取り巻く周辺村落の果たした役割を解明する上で重要といえる。

前述のように、中世において政治・経済上本遺跡が重要な役割を果たしたことは疑いないが、これまでのところ得られた調査結果は断片的であり、その全容を解明するには至っていない。今後周辺地点や上位段丘面に立地する同時期の他遺跡の調査が進む中で、次第に明らかにされいくものといえる。

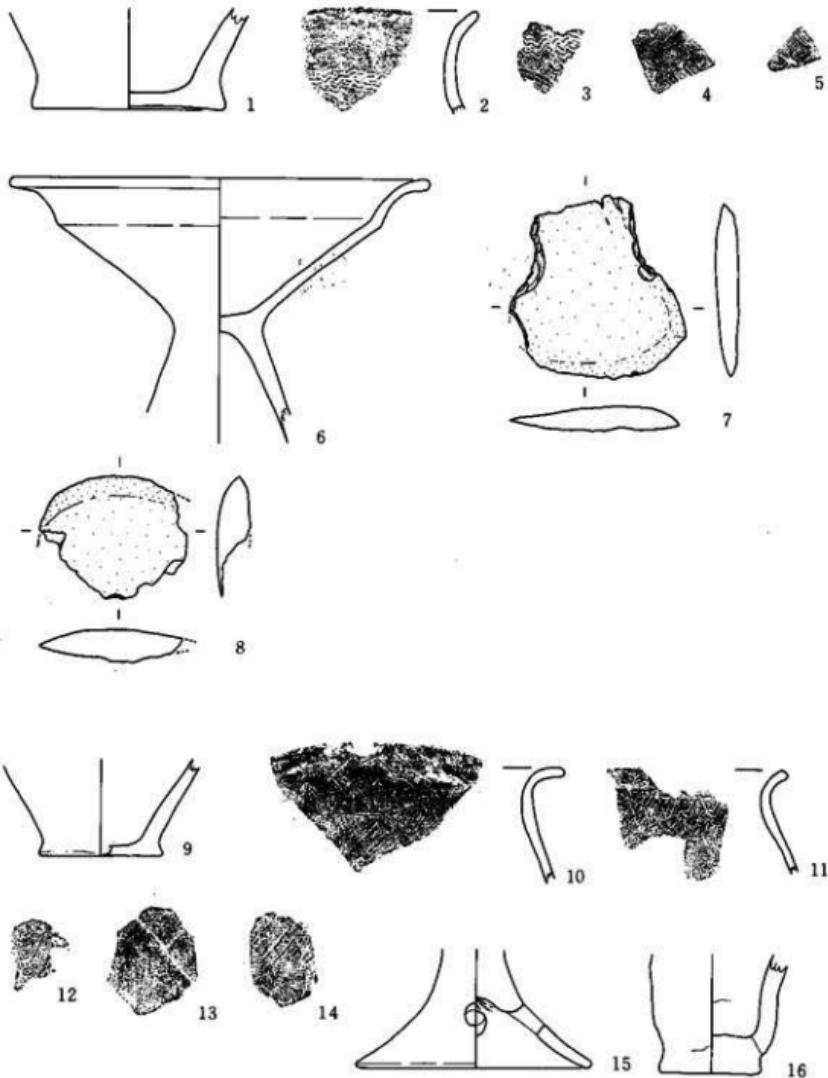
今次調査の結果、縄文時代・弥生時代および中世についていくつかの新知見を加えることができたが、なお遺跡の全体像を呈示するのは困難である。今後周辺地域の調査が進展するに伴ない、本遺跡の位置づけがなされると考える。

最後に、サンプラザー株式会社におかれましては文化財保護の本旨に厚い御理解をいただき、調査の実施にあたって多大なる御高配・御協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

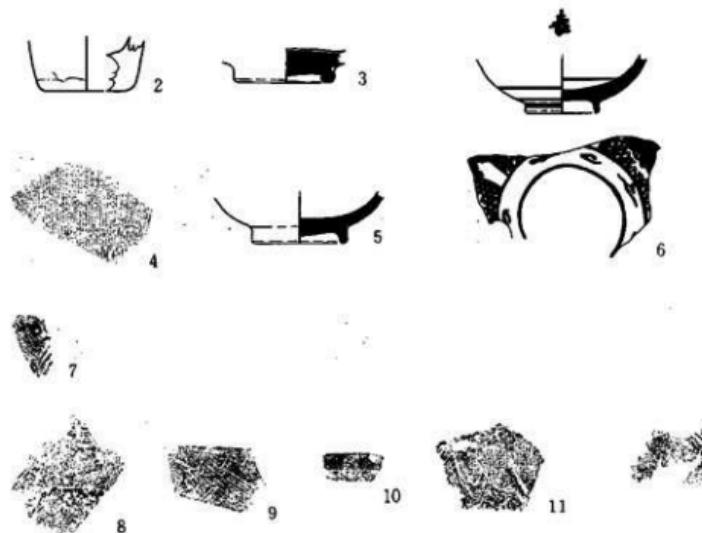
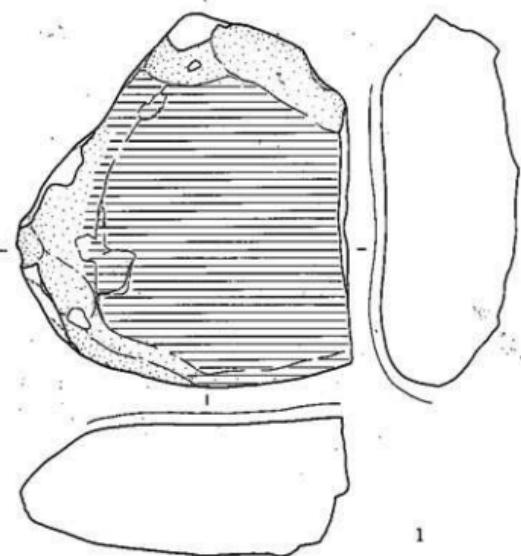
〈引用・参考文献〉

- | | | |
|-----------|------|-------------------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1980 | 『猪小場遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1985 | 『町道知久町中村線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』 |
| 飯田市教育委員会 | 1987 | 『殿原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1989 | 『下原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1989 | 『六反畝遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1990 | 『日向田遺跡II』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『田井座遺跡・一色遺跡・名古熊下遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『田井座遺跡』 |
| 鼎町教育委員会 | 1975 | 『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』 |
| 鼎町教育委員会 | 1983 | 『矢高原・八幡原遺跡』 |
| 鼎町教育委員会 | 1984 | 『鼎町黒河内遺跡』 |
| 鼎町史刊行委員会 | 1986 | 『鼎町史』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 | 『下伊那史 第2巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 | 『下伊那史 第3巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1991 | 『下伊那史 第1巻』 |
| 喬木村教育委員会 | 1978 | 『伊久間原』 |
| 喬木村教育委員会 | 1980 | 『伊久間原遺跡II』 |
| 喬木村教育委員会 | 1991 | 『伊久間原遺跡 下原』 |
| 中央道遺跡調査会 | 1973 | 『中央道調査報告 一飯田地区— 昭和45年度』 |
| 中央道遺跡調査会 | 1975 | 『中央道調査報告 一下伊那郡鼎町 その1・天伯A—』 |
| 長野県史刊行会 | 1983 | 『長野県史 考古資料編 主要遺跡(中・南信)』 |
| 長野県史刊行会 | 1988 | 『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』 |

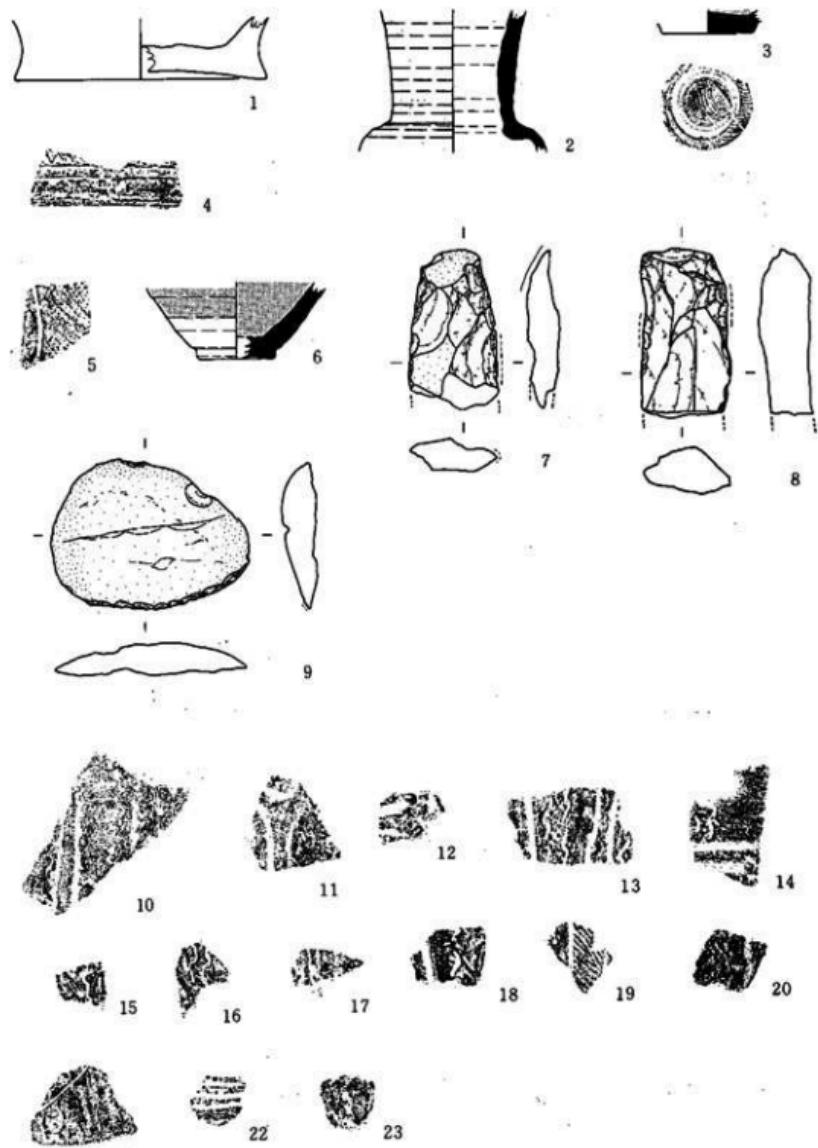
図 版



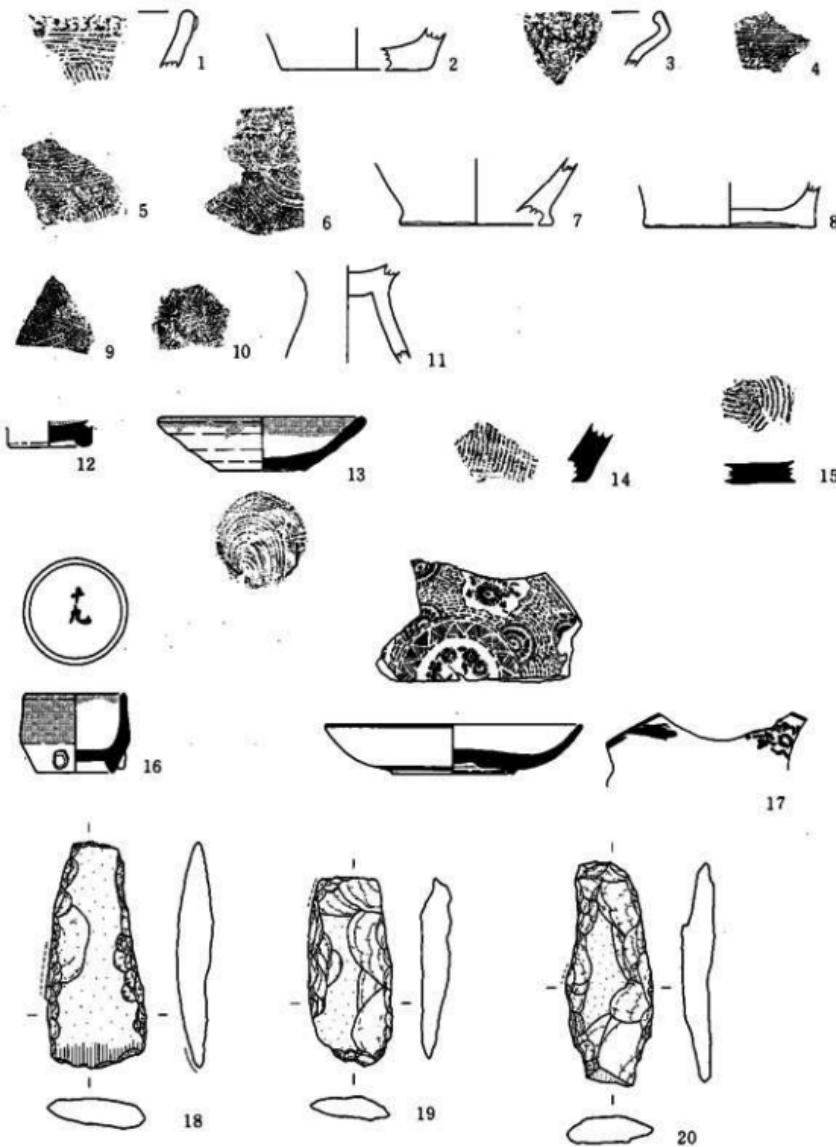
第1図 32・34号住居址出土遺物 (1~8 32住 9~16 34住)



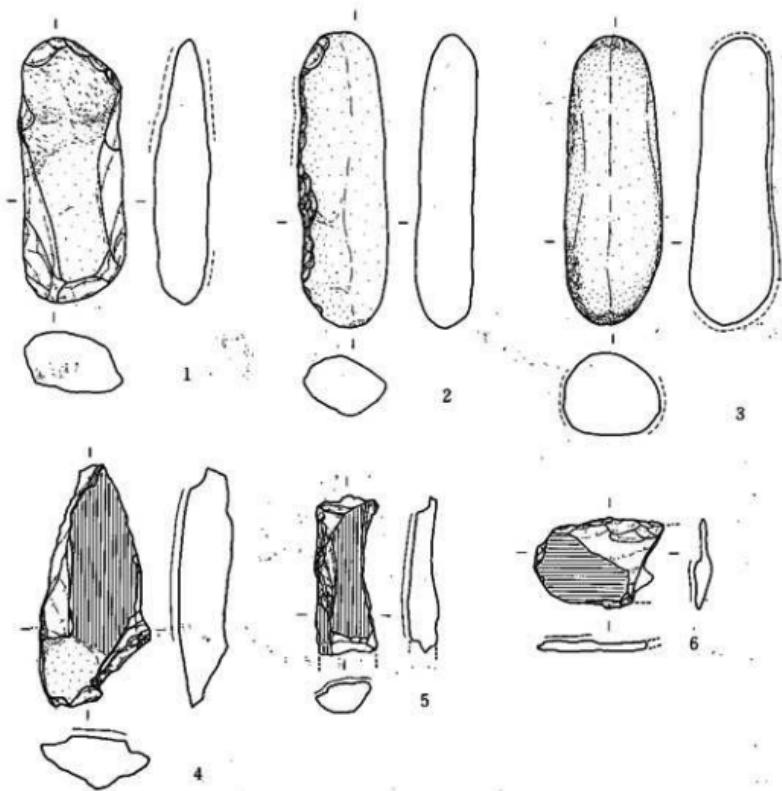
第2図 34・33・36号住居址、竪穴8、方形周溝墓9・10出土遺物 (1 34住 2・3 33住
 4～6 36住 7 竪穴8
 8～10 方向9 11・12 方周10)



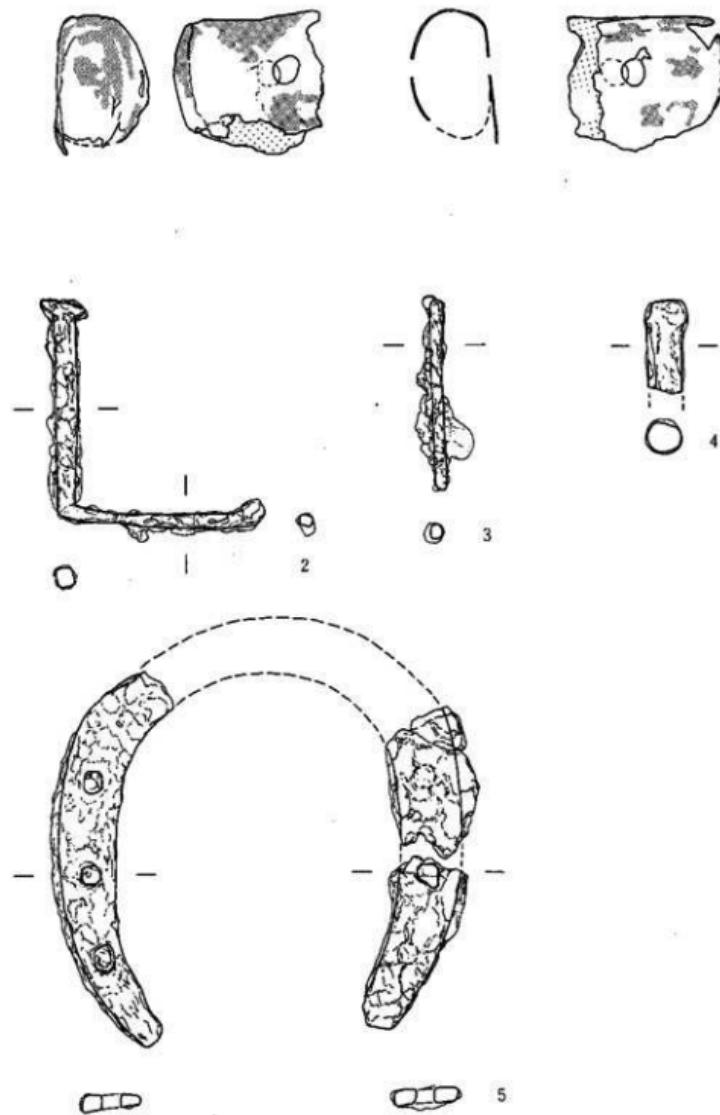
第3図 溝址28~31、遺構外出土遺物 (1 溝28 2~4 溝29
 5~8 溝30 9 溝31)
 (10~23 遺構外)



第4図 造構外出土遺物



第5図 遺構外出土石器



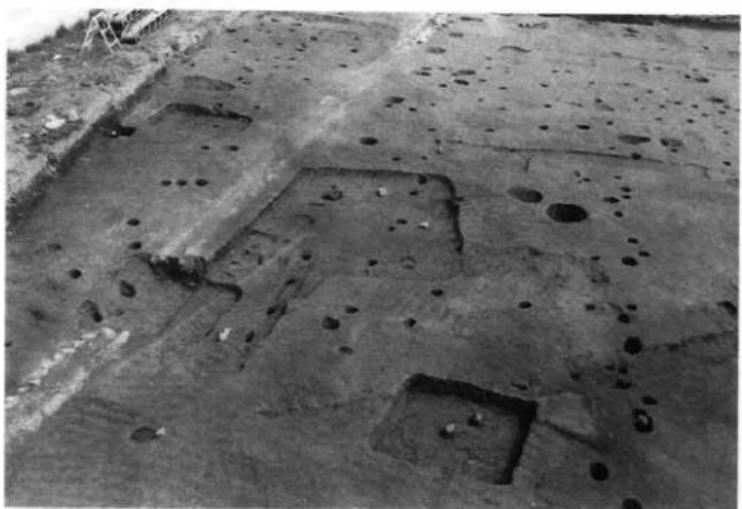
第6図 金属製品 (1・5 造構外 2・3 土19)
4 穴9

写 真 図 版

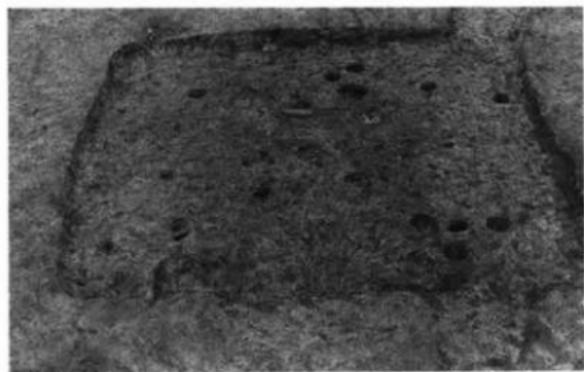
図版 1



遺構分布状況



同 上



32号住居址



同 炉



同遺物出土状態

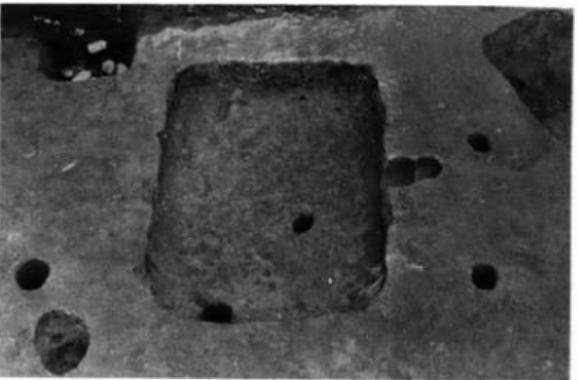
图版 3



34号住居址

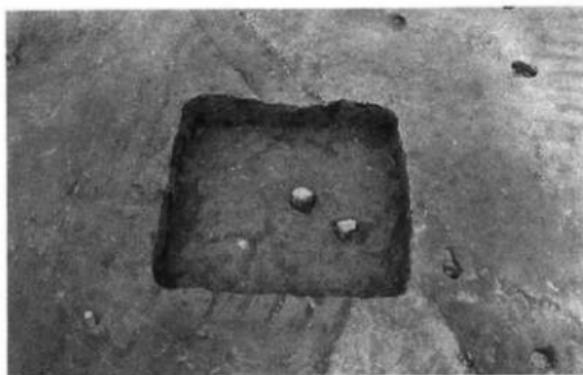


土坑19



竖穴3

図版 4



竪穴 7



竪穴 9



方形周溝墓 9

図版 5



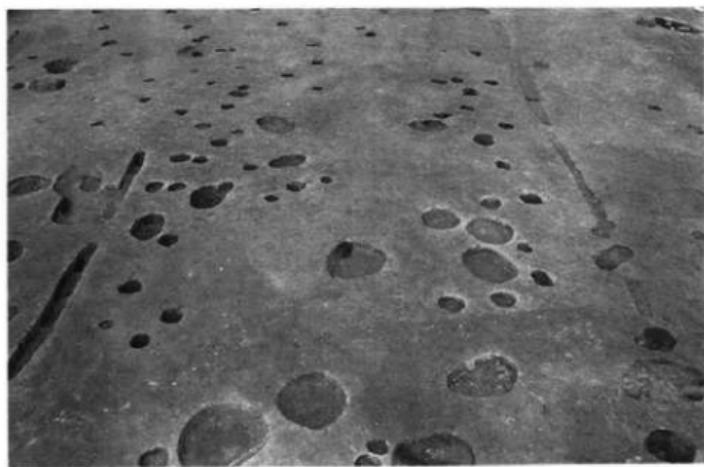
方形周溝墓
10



溝址28~30



溝址31・32



溝状址
1・2

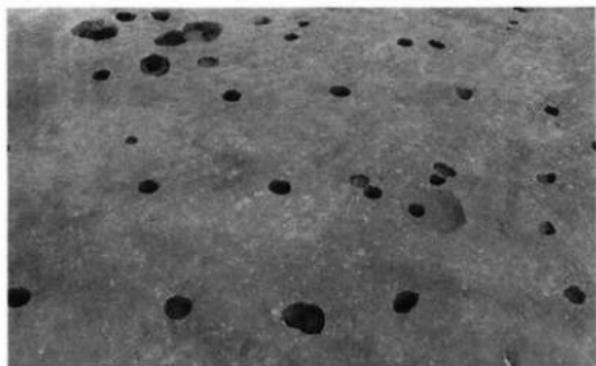
図版 7



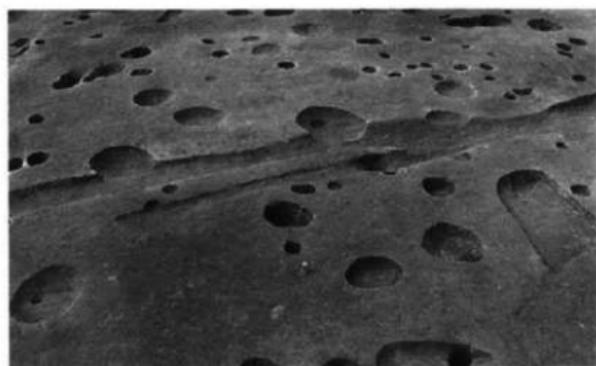
集石
1



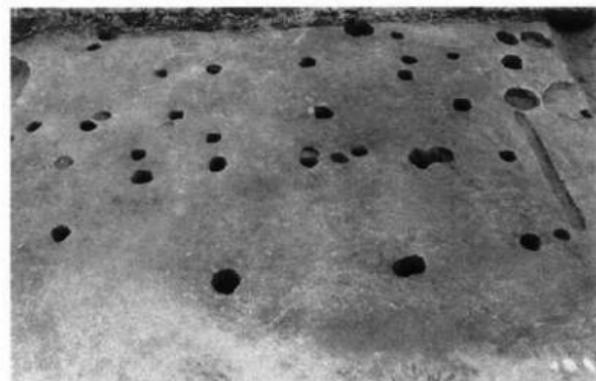
日トレンチ



柱穴群

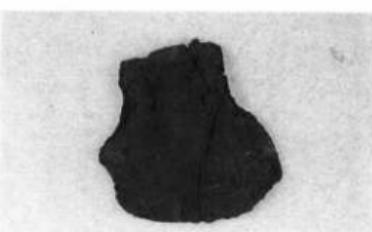
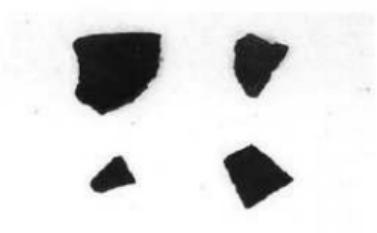
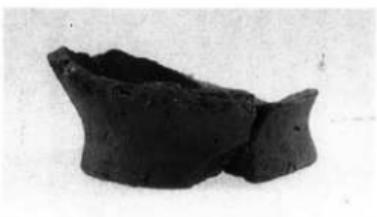


同上

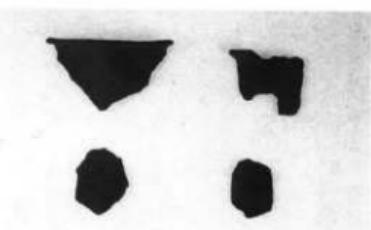
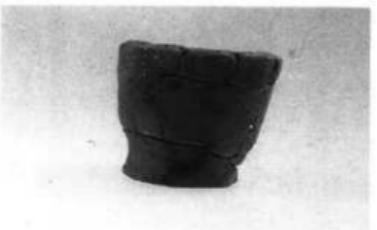


同上

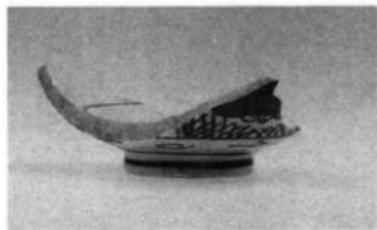
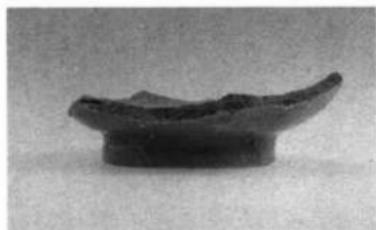
图版 9



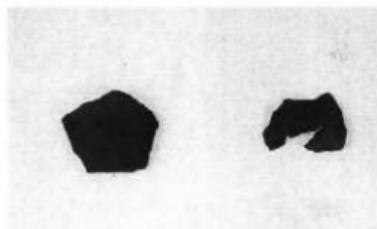
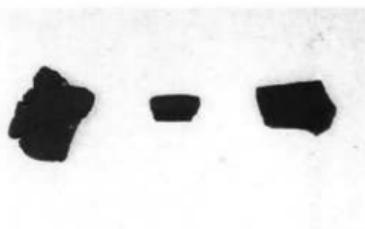
32号住居址



34号住居址

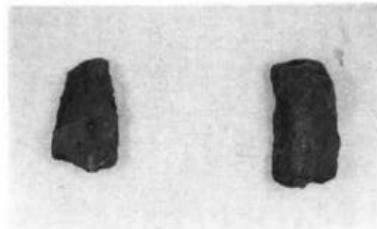


36号住居址



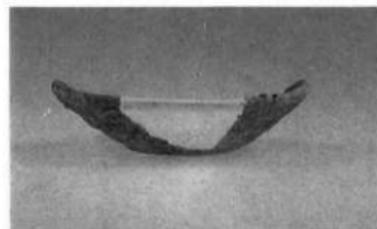
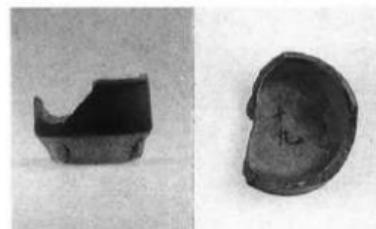
方形周溝墓 9

方形周溝墓 10



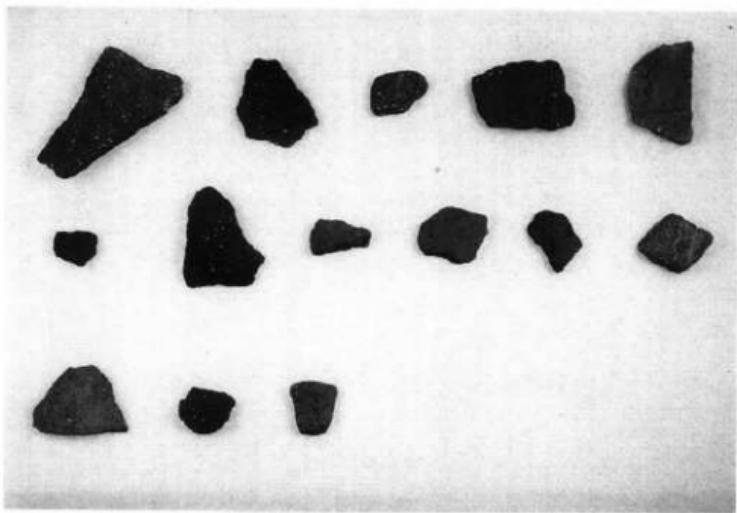
溝址29

溝址30

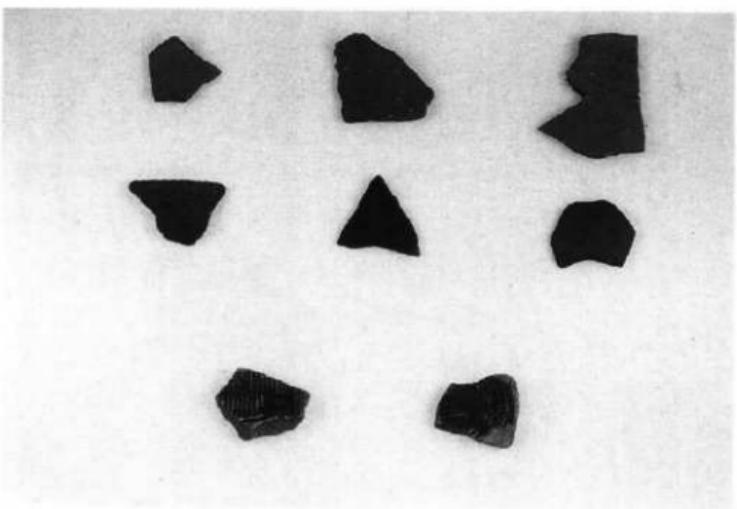


造構外出土遺物

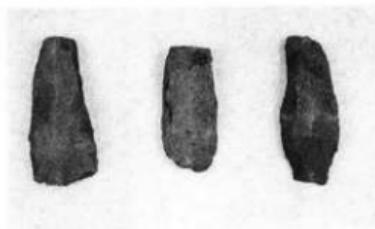
図版11



遺構外出土遺物



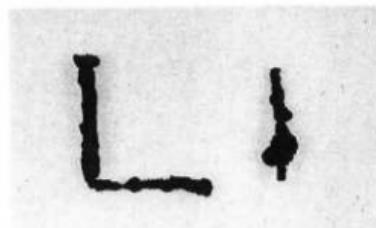
同上



造構外出土遺物



同上



土坑19



造構外出土遺物



造構外出土遺物

図版13



試掘調査風景



発掘作業風景



同上

田井座遺跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財
包蔵地緊急発掘調査報告書

平成4年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印 刷 飯田共同印刷株式会社

